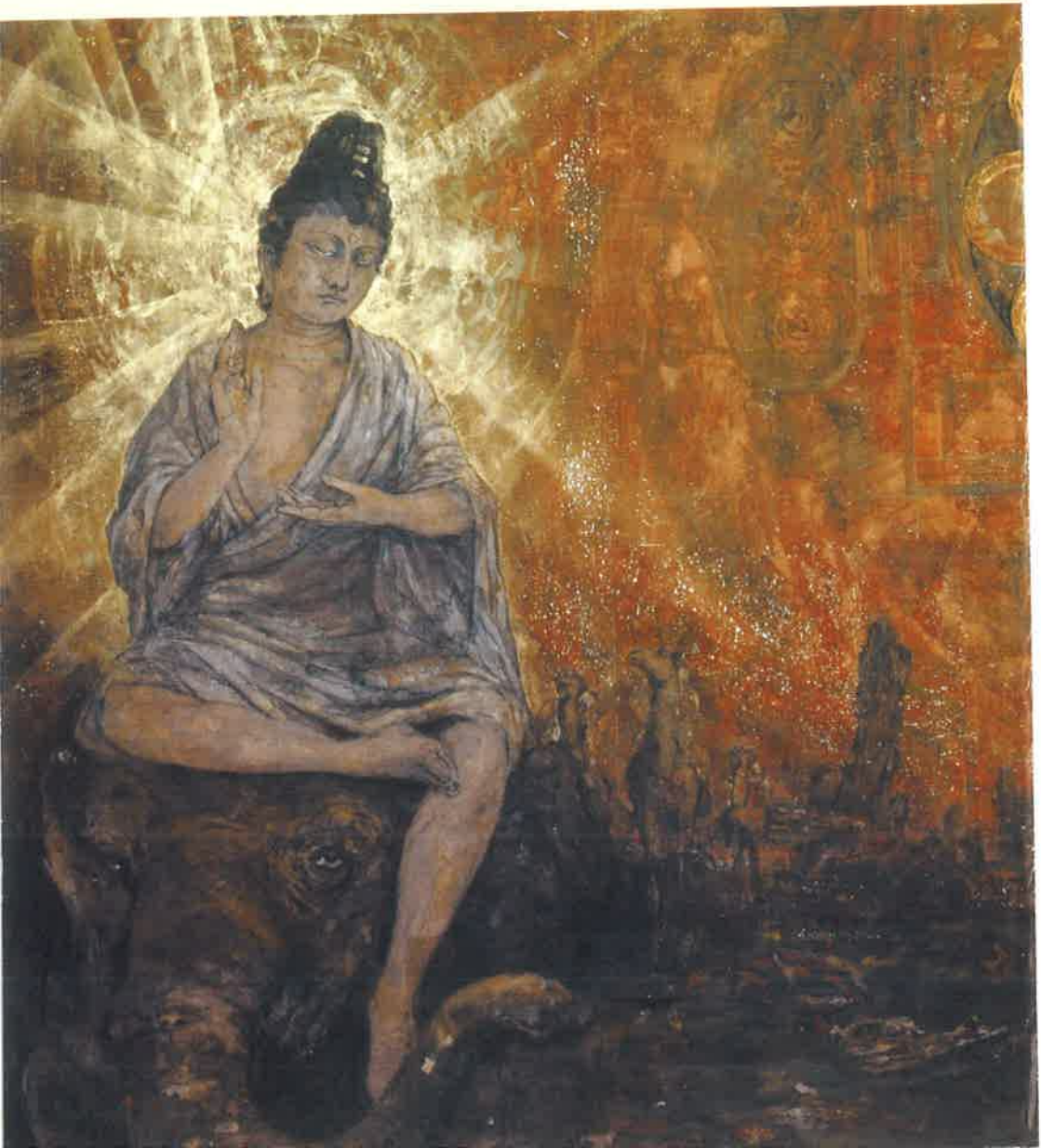
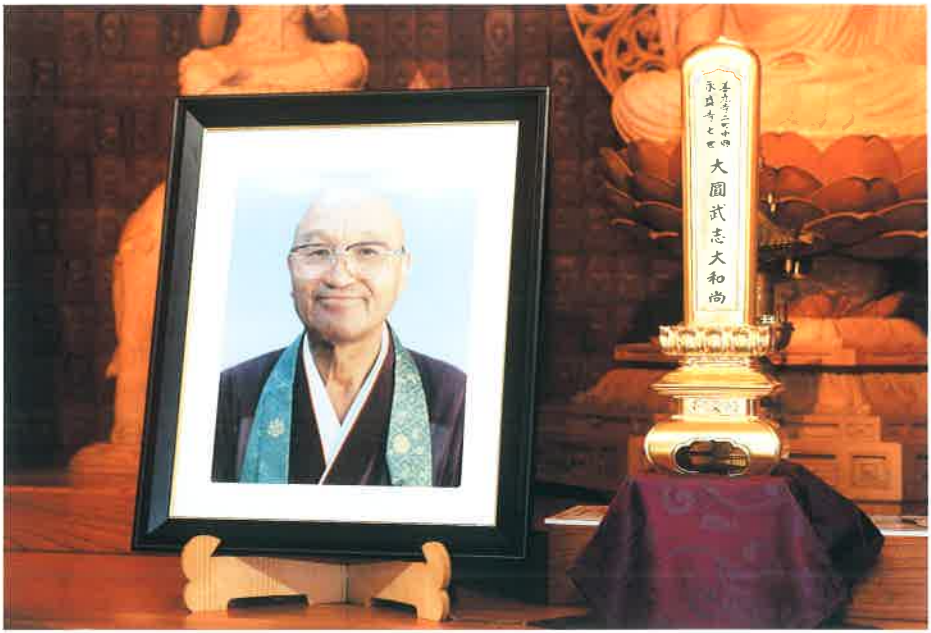
成・壽

SEIJU
2006年
第37巻
冬季





特集

當山二世中興
大圓武志大和尚一周忌

その志を
永遠に伝えて

香語を唱える本寺光真寺住職

教区ご寺院様

お供物を導師にお渡しする

尊宿ご寺院様

大乗寺山主・東老師

ご寺院様によるご焼香

ゆかりの方々によるご焼香

謹啓

初冬の候、御一統様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、今回善光寺季刊誌『成寿』第三七号をお届けいたします。

この号は、特に昨年暮れに行われた当山二世中興大圓武志大和尚の一周忌法要等のご報告や石川県の古刹大乗寺・永光寺の特集をさせて頂きました。

ご高覧頂ければ幸いでございます。

皆々様のご健勝をお祈り申し上げますと共に今後とも尚一層の御法愛、御教導賜りますよう何卒宜しくお願い申し上げます。

謹白

平成十八年十二月吉日

横浜善光寺　住職　黒田博志　合掌

カラー■當山二世中興大圓武志大和尚一周忌……1
特集●在りし日の先代方丈さまを偲んで……10
●先代方丈さまの遺偈に触れて―秋季彼岸法会―……22
カラー■北陸の古刹―大乗寺と永光寺―……29
特集●曹洞宗ゆかりの地・北陸の寺々と大圓和尚の思い出……41
連載●『普勧坐禅儀』に学ぶ　その一……安藤嘉則 52
カラー■国際レポート・アメリカ「MAEZUMI INSUTETUTE」オープニングセレモニー・ドイツ「普門寺」開創十周年慶讃報恩法要・聖慈母観音菩薩開眼法要……59
特集●国際レポート・アメリカ
前角インスティチュートオープニングセレモニーに参列して……黒田博志 67
●国際レポート・ドイツ　開眼法要の記……山口晴通 71
●ドイツ訪問記　大倫の花……東郷　敏 75
読物●盂蘭盆会法要法話　心の器、身を調える……西田正法 83
●善光寺霊園ニュース……101
●胡建明師の学位（博士号）授与式に列席して……安藤嘉則 109
●ニュース・アラカルト……111
読者のたより　119　編集後記　126

題字・イラスト　伊藤三喜庵

巻頭言

善光寺住職　黒田博志

早いもので、師父大圓武志大和尚の三回忌を迎えました。

去年の一年、私は唯々無我夢中、刻々必死に走り抜けた気がいたします。

それに比べ、この一年というのは、少し考え、ものを観ることのできる時間を持てたように思います。

そこで、師父大圓和尚が開創以来常に掲げていた「宗祖を通して釈尊に還る」という思想、師父はどのような考えからこのような理念を打ち立てたのかを考えました。

それを知るために、まず最初に曹洞宗の歴史の原点を自分の目でみ、肌で感じ、そして知ることが大事であると痛感しました。

私は今年の六月、石川県の古刹、大乗寺と永光寺を訪ねました。師父の独立への第一歩もまた北陸路でした。この地から全国一周托鉢行脚もはじまっています。これは偶然ではないと思いました。

大乗寺と永光寺は、永平寺と共に曹洞禅の源流をなす重要なお寺です。大乗寺のご開山は永平寺第三世の徹通禅師、永光寺のご開山は徹通禅師のお弟子の瑩山禅師です。両山へ拝登して、曹洞宗の法脈の尊さ、歴史の重さを改めて確認することができました。

奇しくも只今大乗寺の山主様は師父大圓和尚ともっとも親交の厚かった東隆眞老師。ご老師より師父の話を聞かせていただきながら、大乗寺、永光寺の歴史、さらに曹洞宗の飛躍とその経緯までお伺いすることができました。おかげさまで、善光寺創成期の師父の苦労を実感しながら、善光寺の位置づけ、目標、そして私

の歩むべき方向というものをおぼろげながら感じることができました。

また、五月には、アメリカ・マサチューセッツ州にできた「前角インスティチュート」のオープニングセレモニーに参列し、九月には、師父大圓和尚が二〇〇二年に講演させていただいた、大変ご縁の深いドイツの普門寺様での十周年記念式典並びに晋山式に参列させて頂きました。

改めて師父の残した足跡の大きさを強く感じると同時に、師父を生前お支え頂いた多くの檀信徒の皆様方、関係の皆様方に深く深く感謝せずにはいられない気持ちです。

また、山内では、五月に「港南ひばりの森霊園」を開園することができ「横浜やすらぎの郷霊園」も新区画を開放させていただくことができました。

昨年の師父の一周忌よりこの一年滞りなく無事に行事を勤めることができましたことをここにご報告申し上げます。

これも檀信徒の皆様方、関係の御寺院の皆様方、関係各位の皆様方のおかげで

ございます。重ねて心より深く深く感謝申し上げます。

今後とも師父の心を心として、若輩ではございますが、精一杯尽くして参りたいと思います。

在りし日の先代方丈さまを偲んで

當山二世中興　大圓武志大和尚一周忌

平成十七年十二月十日、成寿山善光寺二世中興大圓武志大和尚の一周忌法要が横浜善光寺で執り行われました。この日は宗門関係者、壇信徒、親族などが善光寺に集まり、本寺光真寺住職黒田俊雄老師の導師により午後三時から釈迦殿で法要が行われました。大勢の僧侶による力強い読経のなかで、大圓和尚の在りし日の面影や数々の偉業を偲びました。

また、実兄でもある黒田俊雄老師や五十年来の友人でもある大乗寺山主の東隆眞老師、神奈川県第二宗務所第五教区前教区長、永明寺住職石田征史老師のこころ温まるご挨拶では、大圓和尚がすぐそこにいるかのように、いろいろな

場面を思い起こさせてくれました。

法要のあと、場所を客殿に移して、設斎が行われました。ここでは善光寺檀家総代、東郷敏氏のご挨拶に続いて、福厳寺住職新美昌道老師のご発声で献杯が行われ、参列者のみなさまはしばし、在りし日の大圓和尚の思い出に浸っていました。

願わくはもう少し生きていてほしかった

光真寺住職　黒田俊雄老師

昨年ここでお葬儀をいたしました武志方丈の死について話しあいが出来たら、と思っておりましたら、もう一周忌がまいりました。歳月の早さ、人の命の儚さをしみじみと感じさせられます。思えば武志方丈は幼少の頃から、非常に個性が豊かですぐれた創造力をもっておりました。この善光寺を開創し、仏道を通じて武志方丈なりの修行体験に基づいた仕事をさせていただき、武志方丈ならではの素晴らしい人生を送ったと信じております。

生前武志方丈自身も坊さんにさせて戴いた御縁を心から喜んでおりました。又立派な奥様に恵まれましたことは、武志方丈の人生で非常に有難い御縁であったと存じております。

武志方丈が日本の全国行脚を修行して悟った「無一物中無尽蔵」の信念をもって、タイ、米国等で修行した信仰体験から、この釈迦殿やお寺が出来たと思っております。留学僧に対する信念や人生観も自分の人生体験から生まれたもので、余人には出来ないような留学僧の派遣交流という念願も、立派に花開いたのであると思っております。又、武志方丈は「成せば成る。成さねばならぬ何事も、成らぬは人の成さぬなりけり」との信念をもっておりました。この行跡

も彼ならではの個性に基づく独創的発想が具現化したものと信じます。

武志方丈の心中を思うとき、もう少し生きていて、やり残した仕事をしたかったのではないかと思います。しかし人にはそれぞれの寿命や役目があり、その使命を全うしたとき、速やかに仏の世界、お釈迦様の許に帰するものです。武志方丈は見事に、壮絶にその寿命を全うしたものと信じております。

一周忌の法要にあたり、檀家の方、ご信者の方々に心からお礼を申しあげ、武志方丈の心を心として今後とも、若い博志和尚をもり立てて下さいますよう、又善光寺が前にも増して興隆いたしますようお願い申しあげまして、本寺としての追悼の言葉といたします。

白純老師の誓願を受けて

大乗寺山主　東隆眞老師

ただいま、當山ご本寺の光真寺のご住職であり、大圓武志老師のご実兄でもある黒田俊雄老師の御導師のもとに一周忌の法要が行われました。私はしみじみと感じさせていただきながら、読経させて、供養させていただきました。

何かありましたら、また、ふと考えていると き、「黒田さんに電話してみようかな、ちょっと意見を聞いてみようかな」そう思ったその瞬間に「ああ、あの人はもういないんだな」ということが、この一年間しばしばありました。また、あの人が亡くなったことが考えられない、信じられないという気持ちも私には未だにあります。今日、また、しばらくぶりに拝登して、黒田さんの写真を見たり、奥様や光真寺の方丈様、東郷さんとお言葉を交わしているうちに、黒田さんのいるときの雰囲気が蘇ってきました。「身をけずり人に尽くさんスリコギのその味知れる人ぞ尊し」。黒田さんはよくこの歌を法要のときの香語に使っておられました。ただいま、また、光真寺の方丈様がここで復唱されました。いよいよもって、私は、黒田さんがここにいるなとしみじみ感じました。

私は昭和二十九年に總持寺に安居しておりましたが、黒田さんの師匠でお父様である黒田白

純老師は、ちょうど当時の副監院さまでございました。その白純老師のお子様は七人とお聞きしていますが、そのお一人に前角博雄老師がおられます。アメリカに開教に行って、アメリカ国籍を取ってアメリカ人となって、アメリカ人のご夫人をおかれ、実質、アメリカの土になられた、そういうお方でした。今日、お見えになっている方のなかに、グラスマン徹玄老師がおられます。このお方も前角老師のお弟子になられて、前角老師から印可を受けたと聞いています。先年、黒田さんと前角老師の足跡を辿ったとき、マウンテン禅センターのご住職でもある徹玄老師が法戦式をなさっておられ、そこに出席させていただきました。前角老師はそういうふうにして新しいものをつくられていました。

黒田さんも善光寺の事実上の開創者であります。その弟さんの桐ケ谷寺の黒田純夫老師も桐ケ谷寺をどんどんどんどん大きくされました。黒田白純老師のもう一人のお弟子、山形県出身の渡辺清光（せいこう）老師も何もないところから立派なお寺をつくられたと認識しています。

黒田さんも白純老師のそういう一つの方針、誓願を受けられていれると私は受けとめています。

善光寺を中心として、黒田さんのあとを受け継いで、博志さんとその関係の方がみんなで盛り上げて、黒田さんの「身をけずり人に尽くさんスリコギのその味知れる人ぞ尊し」、この香語の精神をますます発揮していただいて、日本仏教界、世界仏教界に活力を発揮されることを願って止みません。

「身をけずり人に尽くさんスリコギの…」

神奈川県第二宗務所第五教区前教区長
永明寺住職　石田征史老師

先代方丈さまとの思い出といえば、私が教区長に就任した当時、たまたま他の寺で後継者をつくらなければいけないとき、方丈様が親身になりまして、その後継者を育成するという、それも待ったなしの逼迫した状況で、時間がない。それを関係者に声をかけて、ほんとうにすごくエネルギッシュに働きかけて、何とか無事に師匠の跡を継がせるようにさせていただきました。それが昨日のことのように思い出されます。

法要の席でも、初めてお会いしたお弟子さんに非常によく声をかけて、そんな場面が非常にありました。

今日は方丈さまの一周忌ということでほんとうに早いわけですが、お写真のようにニコニコと見ておられると思います。

博志様、ここには先代様の思いがたくさんあると思います。でも、私が思うのは「身をけずり人に尽くさんスリコギのその味知れる人ぞ尊し」、この言葉に集約されると思います。私たちが体現しなければいけないことだと思います。五教区におきましても、また、それこそ五教区にとどまらず、これから若い人たちと一緒に協力しあって、活躍していただきたいと思います。

善光寺の色を、博志方丈の色に

檀家総代代表　中村治雄様

檀家を代表しましてお礼申し上げたいと思います。本日は武志方丈の一周忌にあたりまして、大変立派な大勢のお坊さまにご参列いただき、無事一周忌を終えさせていただきましたことに、まず、お礼を申し上げたいと思っています。

私たち善光寺に来るたびに武志方丈のいないことの寂しさを痛切に感じておりました。しかし、そろそろ寂しさを感じているときではなくなって来たと思います。先ほどもお話がありましたように、私は武志方丈が担って来た善光寺の色を、ぜひ、博志方丈の色に変えてもらいたい。博志さんのやり方を広げていく時代になっているのではないか。小泉改革の時代ではありませんが、また、仏教に改革という言葉が馴染むかどうかわかりませんが、基本的には直すところは直し、よい面は伸ばすという意味で、ぜひ、博志さんがこのお寺を立派なものに仕上げていっていただければ、よりありがたいと思います。

私ども檀家はそれをぜひ、応援していきたいと思っています。また、お出でいただきました多くの方丈さまにもご援護いただければありがたいと思っている次第でございます。本日は誠にありがとうございました。

師父の偉大さを実感した一年間

博志住職のお礼の挨拶

本日は師父大圓武志大和尚の一周忌の法要にご焼香賜りまして、誠にありがとうございました。ご導師をお勤めいただきました光真寺の御前さま、大乗寺の東老師さまはじめ、日頃より善光寺を支えてくださる檀家檀信徒のみなみなさま、本日このように無事、一周忌を迎えることができましたこと、すべてみなさま方のおかげでございます。ただただ、深く深く感謝を申し上げます。

振り返りますと、あわただしい月日ではございましたが、師父の偉大さと周りのみなさま方のお心が身にしみた一年でございました。寺の奥、不動殿に師父の遺骨と位牌と写真を安置しております。昼夜を分かたず、いまでも多くの方にお詣りをいただき、都度にいろいろとお話を聞かせていただきました。改めて師父の人となりが尊く、それほどまで広く深く徹底した心尽くしであったのかと、改めて師父の偉大さに感じ入っております。師父は尽くしても尽くしても足りぬ気持ちで、それこそ命懸けで善光寺を築き上げ尊んできたことを、いまさらながら強く強く感じております。

先ほども東老師さまからお話がありましたが、師父が亡くなったあともなおそこに居ますが如

く永遠に生き続けていることを、今も胸の中にしっかりと認識しております。この一年間、多くの方々から励まされ、助けていただきました。私はあまりにも未熟でございます。本日ご臨席のみなさまどうぞ、今後ともご教導賜りますことをお願い申し上げ、本日のお礼の挨拶とさせていただきます。

設斎にて

大圓方丈を近くに感じて

檀家総代　東郷敏様

先ほどは荘厳といいますか、素晴らしく粛粛（しゅくしゅく）たるご法要を拝見させていただきました。日頃拝したくても拝すること叶わぬ素晴らしいものであったと感じさせていただきました。本当にありがとうございました。

『成寿』の中に永平寺の監院、南澤禅師さまが大圓和尚を称して、八面六臂の大菩薩であると、書いてありました。八面六臂の大菩薩ということは、口八丁手八丁心八丁、すべてに通じたお坊さんであったと、大変なお言葉だと思いました。

また、清水寺の森猊下が突然、善光寺ご仏前にお一人お忍びでお詣りになり、森猊下さまにいろいろと山内をご案内したとき、おっしゃったことは「隅々にまで大圓和尚が彷彿としております」と、ひとりご仏前に坐して「人は熱血に惚れるといいます。私もまた熱血に惚れました。この方は清水寺の境内に大きな螢山禅師顕彰の碑を建てられました。このお方でないと、できなかったし、許さなかったと思います」とおっしゃったのです。また、中外日報の形山局長は赫赫として光彩を放ち飛翔する熱球は突然

光芒を失い、闇の中へ消えたと、まこと美しい表現で大圓和尚を偲んでおられました。

その先住大和尚が亡くなるまで、私が褒めてほしかった方がおりました。が、ついに褒めずに亡くなってしまった。それはご子息、博志さんです。ご生前、お父様は「だめだ、だめだ」といって、今日の博志住職を一度も褒めなかったのです。

ところが亡くなられたあの瞬間から、翻然と翻り役割というか責任というか、今日のご挨拶にもあるように突然変わられたのです。大層立派なものを黒田武志方丈は遺しているんです。

ご本人を前にして言いにくいことなんですが、若いばかりのこの博志方丈、あんなに立派な挨拶ができるまでになっておいでなのです。そして、先住方丈さまが跡した『成寿』にコツコツと取り組んで六カ月。立派なものをここに表されました。

やはり息子は親がいるうちはだめなんです。させないで、できないと言う。今日はいろいろとご法要をいただきながら、黒田武志方丈を遠くに追い、いまなお近くに感じていました。

これからも横浜善光寺を今日のみなさま方のお力でますます良き方向に導いていただきますように、どうぞ、よろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

先代方丈さまの遺偈に触れて

――秋季彼岸法会――

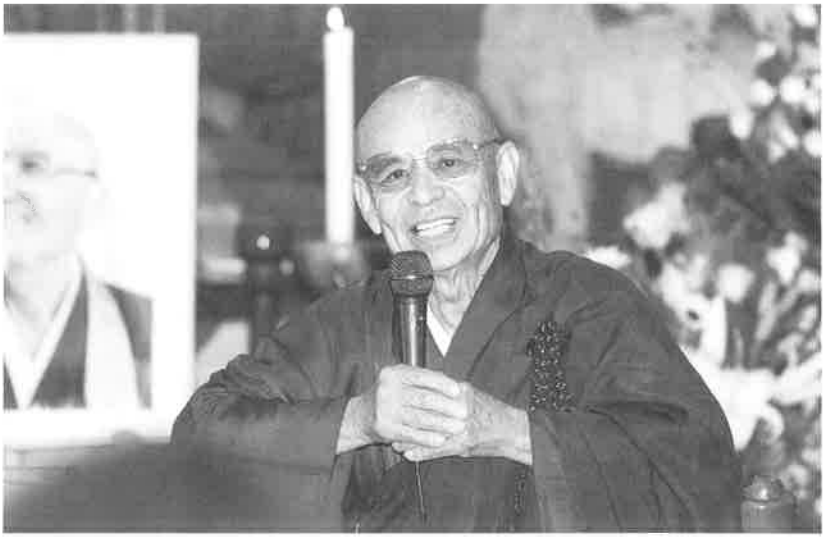
九月二十一日、成寿山善光寺では、秋の彼岸法会が行われました。午前午後の二回にわかれて行われた法要では、大本山總持寺講師で小田原成願寺住職山口晴通老師から、ご法話をいただきました。

祭壇には先代方丈さまの遺偈が飾られ、山口老師の法話のなかで、この遺偈についての解説もしていただきました。ここに要約をご紹介しましょう。

◆

◆

◆



先代方丈さまとは、みなさまもいろいろな思い出があると思いますが、私にもいろいろな思い出があります。方丈さまとご一緒に、アメリカのロサンゼルス郊外の、禅センターでお話申し上げたことが、いちばん記憶に残っています。

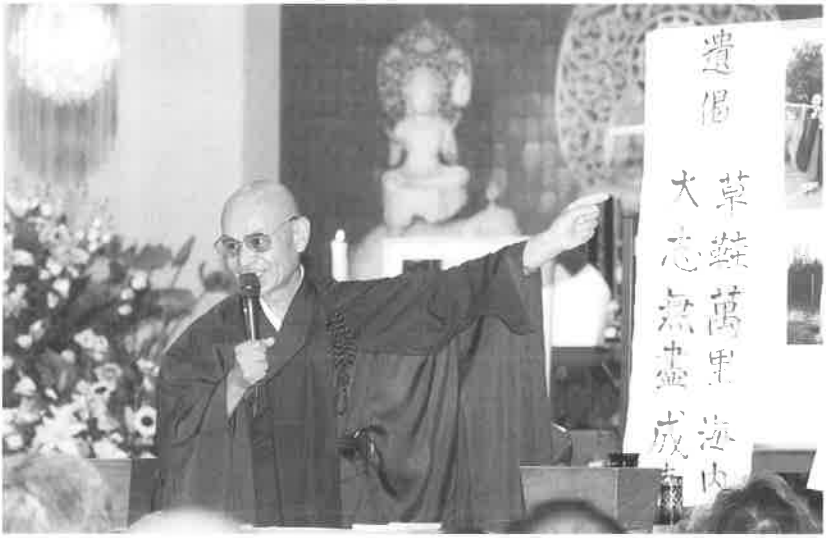
みなさんと私とでは、何回かお会いしているので、心のつながりがありますが、場所がアメリカの禅センターとなると、どういう場所で、どういう人にお話をするのか、初対面の人々と、心の共通点を、どのように持とうかと思って考えたのが、私たち人間が持っている歌でした。

歌は、世界のどんなところにも通じる心です。達磨大師は、自分の法を授ける後継者を決めるのに、四人の弟子に歌をつくらせて、その心を測りました。日本では、天照大神の時代から歌は始まっています。平安時代、長々としたラブレターを書くのではなく、歌を書いて、女の人に届ける。返事があれば、脈があるという大き

なルールがありました。今でも、中国の雲南省の方は、一列に男の方がいて、こちら側に女の方がいて、そして歌と歌を即興的に唄って、そのうちに気に入った同士がグループになり、ある人は結ばれるということのようです。沖縄の方は、沖縄の歌を持っている。それと同じように、どこの民族でも歌を持たない民族はありません。

遺偈の「遺」というのは遺言の「遺」、「偈」は歌のことです。遺偈はご葬儀のときにも、ここにかけられてあったんですが、ご説明しなければ、おわかりにならなかったことと思います。これは本当にありがたい、先代方丈さまのお言葉です。

草鞋萬里　海内開縁
大志無盡　成寿厳然



（そうあいばんり　かいだいえんをひらく
だいしむじん　せいじゅげんぜん）

自分は、わらじ履きで、世界中を駆け巡って来た。そして、内外に関わらず縁を開いて来た。私の大きな願いというのは尽きることがないんだ。

そして今も、この成寿山善光寺を、しっかり見守っているのである。

スケールの大きなお言葉です。最近ではこんなにスケールの大きい遺偈はみられません。

先代方丈さまは、一つのことがらがあれば、もう次のことがらに、それがもう終わらないうちに、次のことを考えていらっしゃいました。私もお供したんですが、スリランカであのような立派な講演をなさいました。続いてアメリカのハーバード、その次にはインドのニューデリー

とご計画がありましたが、残念ですが、スリランカでのお姿が、海外での最後の晴れ姿となりました。

これからもわかるように、禅宗のお坊さんは大切なことをクダクダと言わないんです。この遺偈も、たった十六文字です。この十六字で、ご自分の一生のことを、ピタッと表現するんです。こうするには、平生からよほど研究していないと、こういう言葉を遺すことはできないと思います。

先ほどご紹介がありましたが、今月の六日から、現方丈さまと、檀家総代の東郷さまと、ドイツへ行って参りました。そして、改めて先代方丈さまの、偉大さというものを実感いたしました。

先代方丈さまが、普門寺さまの発展興隆を願って、このお地蔵さまと観音さまのお二方の菩薩

さまをご寄贈なさいました。けれども、残念ながら開眼法要、俗にいう、魂入れを済まされることなく、お亡くなりになられました。当然、現方丈さまが、その開眼法要をなさるべきものですが、現方丈さまが謙遜なされ、私にやってもらえないかとのお話があり、私も、先代方丈さまへのご恩返しと思い、方丈さま、東郷先生のお伴をして行って参りました。

私といたしましては、少しでも先代方丈さまに近づけたらと思い、中国にご一緒したときに、先代方丈さまがくださったお数珠を首にかけ、また、いただいた墨を摺り、それを筆に含ませて、開眼のご供養を申し上げました。先代方丈さまのお袈裟も、私が身につけさせていただきました。先代方丈さまの写真をお飾りして、そして、私なりに一生懸命、開眼供養の文章をつくらせていただきました。その最後の文章には、方丈さまの使われたお言葉を、いろいろとちり

ばめまして歌で結びました。

やがて、善光寺の現方丈さまも、ドイツで行われた儀式、晋山式を、挙行される予定です。

◆　◆　◆

歌をテーマに、アメリカの禅センターでのお話や、大本山總持寺での、石原裕次郎さんの十三回忌法要の山口老師の法話。檀信徒のみなさまも、いつの間にか引き込まれていました。このあと、いつもの法要と同じように、声をあわせてお経を読み、焼香を行いました。そして、法要のあとの客殿では、方丈さま、東郷氏、山口老師の、ドイツ訪問のようすがビデオで流されていました。「観音さまをお祈りしていると、ちょうど空から、三本の光が観音さまを照らしていました」。東郷氏と山口老師の楽しいお話に、和やかな時間が過ぎていきました。

北陸の古刹

―大乗寺と永光寺―

大乗寺 総門

永光寺 法堂

専門僧堂として宗門のすぐれた人材を育成（大乗寺）

東香山大乗寺は、福井県の曹洞宗大本山永平寺の第三世・徹通義介禅師（１２１９～１３０９）が開山されたお寺です。永平寺を下り徹通禅師が加賀の地へ移り、正応二年（１２８９）、守護職の冨樫氏の帰依をうけて、野々市に大乗寺を開きました。平成二十年には七百回御遠忌を迎えます。

現在の金沢市長坂町に移ったのは、今からおよそ三百年あまりむかしの江戸時代のことです。当時は、加賀藩老本多家の庇護のもとに、二十六世中興月舟宗胡禅師、二十七世復古卍山道白禅師が住職となり、曹洞宗の改革と大乗寺の刷新を実現し、「規矩大乗（きくだいじょう）」の名を天下に知らしめました。

その伝統は現代にも伝えられ、専門僧堂として、禅のきびしい修行の場となっています。近代では渡邊玄宗（大本山總持寺貫首）、清水浩龍（大本山永

大乗寺 赤門

平寺西堂）、板橋興宗（大本山總持寺貫首）の各禅師が住職し、また澤木興道（大乗寺西堂）らのすぐれた高僧が人材を育てていきました。伽藍は曹洞宗寺院建築の典型的な七堂伽藍の配置を示し、仏殿は国の重文指定、その他の建物は、県の指定有形文化財となっています。

専門僧堂として修行僧が常在し、修行しているだけでなく、日曜参禅会や仏教文化講座、書道、香道などの教養講座を開催するなど開かれた寺院として、広く金沢や北陸地方以外の地域からも禅の心を愛する人々に親しまれています。

金沢の市街から少し外れた静かな環境。毎年、七月には法堂の前に蓮の花が開き、まるで極楽浄土を見ているような風景が目の前に現れます。

大乗寺 法堂

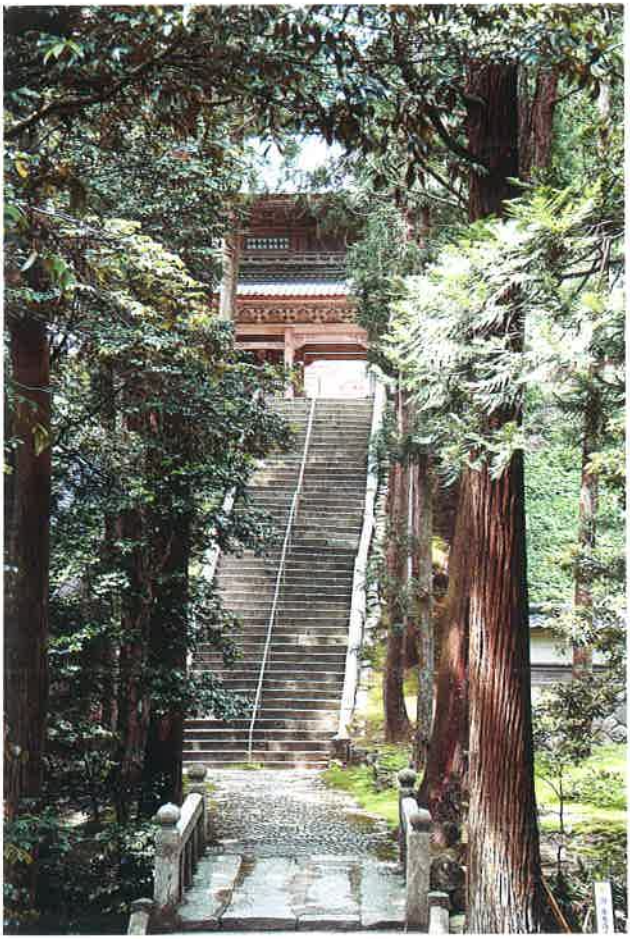
大乘寺 法堂

大乗寺 僧堂

大乗寺 僧堂外単

曹洞宗の五祖を祀った五老峯のある寺院（永光寺）

徹通義介禅師の弟子、大乗寺第二世・瑩山紹瑾禅師（１２６８～１３２５）が開山されたお寺が永光寺です。鎌倉時代、正和元年（１３１２）、能登の地頭、酒匂八郎頼親の娘平氏女とその夫が寄進した土地に瑩山禅師が茅屋を建てたことから始まります。その後正中元年（１３２４）に法堂が建てられました。また、瑩山禅師は曹洞宗の法燈を伝えるために天童如浄の語録、永平道元の霊骨、孤雲懐奘の血書経典、徹通義介の嗣書、自らの五部大乗経を埋納した五老峯を築き上げました。瑩山禅師は口能登にこの永光寺を建立した後、奥能登に總持寺（現



永光寺　参道

在の總持寺祖院）を創建し、曹洞宗の基盤を整えていきました。

次第に伽藍も整備された永光寺は後醍醐天皇をはじめとした勅願寺となり、また、足利将軍家の援助を受けるなど、曹洞宗の代表的な寺院として、繁栄をきわめました。

しかし、応仁二年（1468）、兵火により多くの建物を焼失。のちに後土御門天皇の祈願所となり再興されましたが、天正七年（1579）に上杉謙信の兵によって、再び焼け落ちました。

近世は次第に力を失いますが、江戸時代前期には中興の祖、久外嬾（娩）良が、江戸時代後期には碓傳南童によって復興し、近代に入っては弧峯白巌によって、山門、本堂の修復、書院と接賓の新築が行われました。また、山岡鉄

永光寺　伝燈院

舟からの書の寄付も大きな力になっています。近代は雪国の過酷な自然や台風などの被害が伽藍の老朽化に拍車をかけていましたが、平成九年、曹洞宗の宗門的な事業として「五老峯永光寺復興奉賛会」が結成され、伽藍の整備や史料の調査も進んでいます。

杉木立の中の長い石段の上の古刹。五老峯の存在からも曹洞宗の歴史に大切なお寺であることがわかります。

［参考］「永光寺ものがたり―歴史と文化財―」五老峯永光寺復興奉賛会発行

永光寺　山門

永光寺 峨山道

永光寺 五老峯

永光寺 魚鼓

永光寺 開山塔

二つのお寺を訪ねて、曹洞宗の歴史に触れてみませんか

善光寺では来年春、檀家のみなさまとこの大乗寺と永光寺を訪れる旅行を計画しています。永光寺では「そば打ち」も体験できるかもしれません。曹洞宗ゆかりの名刹をめぐりながら、楽しい時間を過ごしたいと考えています。詳しい旅行の日程やお申し込みの方法は、追ってご連絡させていただきます。みなさまも、奮ってご参加ください。

永光寺

大乗寺 仏殿

曹洞宗ゆかりの地・北陸の寺々と大圓和尚の思い出

金沢大乗寺に東隆眞老師を訪ねて

ご存知のように、大本山永平寺や總持寺祖院をはじめ、高祖道元禅師や太祖瑩山禅師は北陸の地から曹洞宗を広めてきました。いまもこの二寺をはじめ、大乗寺や永光寺（ようこうじ）など、いくつもの名刹がその姿を残しています。

これからの善光寺のあり方を求めて、博志住職は平成十八年六月のある日、檀家総代の東郷敏氏とともに、この北陸の大乗寺と永光寺を訪ねました。くしくも大乗寺には先代大圓和尚の学生時代からの親友でもあり、善光寺留学生育英会の理事でもある東隆眞老師が山主として執務にあたっておられます。東老師はまた、永平寺で修行した瑩山禅師が總持寺を開く前に創立し、曹洞宗の歴史でも意味深い名刹永光寺の研究、調査に関わられ、五老峯永光寺復興奉賛会会長でもあります。創成期の曹洞宗における興味深いお話と善光寺のあるべき方向を伺うことができた貴重な時間でした。

●師の系譜を大切にする曹洞宗

東郷　東老師の論文や著作はいろいろなところでお見受けするのですが、そのなかでも『旅の

手帖　増刊・彩都』という雑誌のなかで写真家の織作峰子さんと対談されているものがわかりやすく、拝見させていただきました。

東老師　大乗寺のご開山は徹通義介禅師です。このお方は道元禅師のお弟子で、やがて懐奘禅師（永平寺第二世）の法嗣となり、永平寺の第三世に就きました。道元禅師がお亡くなりになったあと、道元禅師の弟子たちの横の関係を巡って、派閥的な、感情的な、思想的なわだかまりが生まれてしまいました。要するにお互いに自分が正統派で、自分が道元禅師の一番の弟子だと思いたい、思わせたいわけです。そういうことで暗雲が立ちこめていたと思います。徹通禅師もそのなかに巻き込まれてしまいました。徹通禅師は長い間、永平寺にいましたから、そのときはもう七十歳ぐらいでした。永平寺を出て加賀の地へ下りてきてこの大乗寺を開くわけです。

東隆眞老師

●創成期の曹洞宗の系譜

天童如浄
道　元（永平寺）
孤雲懐奘
徹通義介
瑩山紹瑾
峨山韶碩（總持寺）
明峯素哲（大乗寺）（永光寺）

瑩山禅師は徹通禅師のお弟子なのですが、歳が離れていて、そのときはまだ二十歳前後、ちょうど孫とおじいさんのような感じです。師匠の徹通禅師の後ろ姿を見ながら、瑩山禅師もその後について、永平寺から下りてくるわけです。そして、瑩山禅師は師匠がいかに道元禅師とつながっているか、正当な師匠であるかということを証明しなければいけません。そうしないと自分の立場も疑われることになるかも知れない。

師匠が曹洞宗の正統であるということをまず立証するわけです。それが伝光録であった。また開山堂の祖師方の祀り方です。開山堂といいますと、そのお寺のご開山さん、創業者だけを奉るのが普通ですけれど、大乗寺は違っています。三人の霊骨を収めています。永光寺もそうなんです。永光寺は五老峯といいますが、五人の僧を祀っています。道元禅師が宋で教えを受けた天童如浄禅師が高祖です。その次に道元禅師がきて、懐奘禅師、徹通禅師、瑩山禅師と続きます。

東郷　祖師の系譜を大切にするというのは瑩山禅師の思想ともいえますね。

東老師　いま風のいい方をすれば、師匠が不当に差別を受けたり、いじめを受けたりされたことに対して、師匠の気持ちを瑩山禅師は自分なりに受け止めて、それをさらに曹洞宗の発展に結びつけようとするのです。永光寺の次に總持

寺を開くのですが、總持寺でもそうした思想が表れています。よく知らない人は「太祖（たいそ）堂」と勘違いしているんですが、あそこは「大祖（だいそ）堂」といいます。複数のお祖師さまがたがおまつりしてある。つまり、ずっとつながっているんだと。これが瑩山禅師の宗乗です。宿願です。それだけでなく、總持寺の場合、瑩山禅師はこんなこともいっています。お弟子の峨山さまに總持寺を譲るについて、「韜光晦迹することを許さず、宗風を一興せよ」。普通、禅寺のお坊さんは、いい影響を周りの人たちに与えて自分はスーッと世間から消えていく。足跡を残さない。それを美徳としています。ところが瑩山禅師は弟子の峨山禅師にそれではいけないといっています。そして宗風を一興せよと。道元禅師、徹通禅師、自分のところに至っている正伝の仏法の流れを興隆させてほしいというのが瑩山禅師の思いなのです。それで峨山禅師はその通り見事に実行したわけです。

ですから、徹通禅師の思いが瑩山禅師に伝わり、瑩山禅師はさらに弟子をつくり、寺を建て、なかでも明峯素哲禅師と峨山韶碩禅師の二人に期待をかけました。大乗寺と永光寺は明峯禅師の系統です。明峯禅師の系統は地味です。伽藍を建てるってこともちろんやりますが、それよりもいわゆる正法眼蔵の教えをひたすら修行するといったような傾向が強く表れています。峨山禅師の場合は、曹洞宗を教団として組織化するのに手腕を奮いました。曹洞宗は現在約一万五千か寺ですが、江戸時代には一万七千か寺あまりもありました。その八割がたは峨山派、總持寺の系統ですから、その原動力は峨山禅師にあるといってもいいでしょう。徹通禅師が永平寺から出たその心中を瑩山禅師がよく受け止めて、そしてそれを自分の弟子である峨山と明峯に伝えたことがいまの曹洞宗の源流を築いて

大乗寺法堂にて

いるのでしょう。

東郷　大圓和尚もかねがね「宗祖を通じて釈尊に還る」とよく語る場面がありましたが、まさにここにつながるのではないかと思います。

●大圓和尚の遺したもの

博志住職　師匠が東老師に毎日のように長い電話をおかけしていたことが子どものときの記憶として残っていますが、東老師との深いご縁のなかで師匠がどのようなことを考えていたのかをお聞きしたいのですが。

東老師　黒田さんは曹洞宗の申し子といってもいいと思います。そして、八面六臂といいますか、活躍をして、黒田さんは力尽き根尽きて倒れたと思います。黒田さんの理想や具体的な行動は『成寿』のなかに出ています。あれを丹念に読みますと、黒田さんの思いというのがどこにあるかよくわかります。

ただ私は、黒田さんから、こういうことを聞いたことがありました。善光寺を興した頃です。なかなかお参りがないと。いろいろな会を興して、お参りしてもらおうと努力しても、なかなか集まらない。しかし、いろいろな会を、お参りの方があってもなくてもやっているうちに、来ていただけるようになったといってました。その不退転の気持ちですよね。

東郷　確か、善光寺開創三十周年のときにご老師が『成寿』にこの行事のことを書いておられましたね。

東老師　黒田さんは正しい道を歩いたと思います。着眼点も本質をついている。「宗祖に還る」「宗祖を通じて釈尊に還る」。これが黒田さんの発想のいちばんの根本です。お寺では檀信徒の方々をお相手することが多いと思いますが、しかし、よくよく見てみますと、黒田さんは宗門の命脈である坐禅や修行を決して忘れていませんでしたと思います。黒田さんの生前の最後の『成寿』を拝見しましたが、あれはタイですか、坐禅を指導しているではないですか。あの場面を見てすぐそのことがわかる。

博志住職　改めて原点に還るということですね。

東老師　もうひとついいますと、海外での経験で培ったものもあります。アメリカにマウンテン禅センターをつくられたお兄さん、前角博雄老師がいらっしゃいます。考えてみますと、このお方はけた外れにすごい業績を残した人です。黒田さんはその影響も受けていると思いますね。実際お兄さんのもとへ行っていろいろお手伝いしながら、海外布教の厳しさを身をもって経験したと思います。

東郷　東老師は育英会が生まれたときから理事をなさっていますが、大圓和尚から何かご相談がありましたか。

東老師　べつに相談はありませんでした。黒田

タイで坐禅を指導する在りし日の大圓和尚

さん御自身が発案したようです。自分自身が托鉢したり、タイやアメリカへ行っていろいろ苦労を経験しました。そこで若い人材を育成するためには何が必要か、自分がいちばん苦労したことといえば、結局、経済的な問題でしょうから、そういう点でフォローすることができればいいかなということで育英会をつくったと思います。当初は苦労していたようです。売名行為などといわれ、周囲から理解されるまでかなり時間がかかったようです。しかし私は、「止めちゃダメだ」と。つらいでしょうし、厳しいでしょうけれどやってくれと。あなたのやっていることは決して間違ってないから、そのうち必ずみなさんが理解してくれるから止めちゃダメだと、説得したことが思い出に残っています。

東郷　育英会にしても、清水寺の瑩山禅師顕彰碑にしても、すべて東老師がパートナーとして関わっていただいている。大圓和尚はいつも「オレの頭は帽子の台だけで、中身は東老師にある」といっていました。

東老師　利用されて光栄ですよ（笑）。しかし、実はそうではありません。ひらめきとか、見通す力とか、黒田さんはすごいものを持っています。黒田さんの言っていること、やったことはほとんど失敗していないのではありませんか。みんなうまくいっています。

東郷　他の人と違うのは、信念、理念、哲学が私にはあって、これは死ぬまで変えないとよくいっていました。その一つが「祖師を通して釈尊に還る」で、いま一つが「仏道を通して、世界平和に貢献する」でした。そして、その具体的な行動は「身を削り人に尽くさんスリコギのその味知れる人ぞ尊し」、このお心でした。

東老師　私も大いに彼から啓蒙、啓発されました。あの人の純粋さにです。ちょっと見た感じではそんなふうに思えないかも知れないのですが、彼は非常に純粋で謙虚でした。一見派手な事業家のようなタイプに見られがちですが、個人の内面的なものには純粋なところがありました。話していることとか、態度とか、何かにつけてそうでした。これはみなさんもよくご存知だと思いますが、たとえば旅行に行くと朝四時には起きて日記を書いたり、お経をあげたりしているんです。そのときの彼の表情はいつもと

は全く違っていました。一人の仏教僧。そのなかに彼の本質が出ています。

大学時代も彼は洒落た人で、背広を着たり、ベレー帽をかぶったりしていました。美術にも非常に関心があって、目利きの鋭さも潜在的に培ってきたものでしょう。のみならず、一宗教者としての、坊さんとしての純粋性とか、すがすがしさとか、謙虚さという点の黒田さんを私は知っています。でも、みんなと話していても全然そんな素振りは見せないんです。

それは奥さんが支えていらっしゃるというか、奥さんが非常に大きな力となっておられます。陰にいて黙っていらして、それでいてよく物事を的確に見ておられる。やはり奥さんは黒田さんの最大のブレーンですね。

●これからの時代に求められるもの

博志住職　いろいろと貴重なお話をお聞かせくださいまして、ありがとうございました。私も知らない善光寺の歴史や師匠の姿にも触れることができました。最後に、これから宗教人として、また、善光寺の住職として、どのようなテーマで、どのような役割を担っていかなければならないか、お聞かせいただけるでしょうか。

東老師　それは私の問題でもありますし、博志さんの問題でもあります。そして多くの仏教僧侶、仏教に関わる人たちにも共通の課題であると思います。

私の場合ですと、この古い歴史をもつお寺には専門僧堂があります。僧堂はある意味で実験室のような、教室のようなものです。つまり、ここで人材を育成して、しかるべき宗門僧侶を世の中に打ち出すという役割があるわけです。私にとって、これが今の私のいちばんのポイントです。政治家でも、社会運動家でもない私には、仏教僧として何ができるか。私の場合、こ

講義風景

の大乗寺で伝統を守りながら人材を養成して、さらに現代との関わりのなかで、多くの人々に仏教をうけとめていただくということです。

博志さんの場合、現にもう黒田さんがあれだけのものを創られて、遺されているわけですから、その中にすべてが入っていると私は思います。「お前はこういうふうにしなさい」と。「私はこういうふうにやってきたんだ」と。だから、お前も、いのちがけでそれをやってみろ、できるかと。

私はいつも修行僧たちに言うことが二つ、三つあります。ひとつは「坊さんらしいことをやれ」と。坊さんが坊さんらしくないことをやってはいけない。つまり、坐禅をするとか、おつとめをするとか、作務をするとか、そういう基本的なことをきちんとやることです。

もう一つは「坊さんとして世の中にどういうふうに尽くすことができるか」。そのことをつね

に考えながら修行してほしいと。どういうことを自分がやったらいいか、趣味とか、技術とか、資格とか、能力とか、教養とかいろいろあります。それを総合して、自分に何ができるかということをここで沈思黙考して修行してほしい。そして三番目は、いま、言ったようなことを具体化するために「誓願を持って行動してほしい」、そのことを常に頭のなかにめぐらして考えてほしいということです。

これは僧堂でのことで、僧堂でのやりかたがそのままストレートに通用するわけではありません。しかし、僧侶にとって、僧堂生活はやはり原点だと思います。

坊さんらしく、いかに世の中に尽くしていくか。それにはいろいろなやりかたがありますから、こうしろ、ああしろではない、必ずそういう「願い」を持っていれば実現できます。それをやらない限り仏教は社会的信用、信頼を失っていきます。

それから、私は、この大乗寺をつねにオープンにしています。扉は、いつも開かれています。どこからでも入れる。この物騒な世の中ですから、非常に危険ですけれども、しかし、お寺というものは、オープンなもの、みんなのものである。とにかくこの境内に入って来るだけでも気分が違うといいます。気持ちが安まる。落ちつく。心が洗われる。この感想は日本人も外国人もおなじです。

博志さんも同じです。基本はお師匠さんが全部「こうやるんだ」と自分で実験して見せてくれたわけですから、それをよく思慮して、毎日毎日、お師匠さんの御恩に報いるにはどうやったらいいかを考えて、考えて懸命につとめていけば、自ずから黒田さんが守ってくれると思います。

〈新連載〉

『普勧坐禅儀』に学ぶ　その一

駒沢女子大学　安藤嘉則

一、はじめに

曹洞宗は道元禅師・瑩山禅師を両祖と仰ぎ、今日その法統が脈々と伝えられ、全国に約一万五千もの寺院が全国各地に展開しています。浄土真宗は真宗十派で二万二千と大きな寺院数を占めており、特に大谷派（約九千ヶ寺）と本願寺派（一万五百ヶ寺）二派が大きいのですが、一つの教団としていうならば曹洞宗は伝統的な日本仏教の諸宗派の中で最も大きい勢力を占めているといえましょう。

この曹洞宗には道元禅師や瑩山禅師によって打ち立てられた坐禅の宗旨がその根本にあるのです。しかし坐禅というと特別な修行として考えられる方もおられるのではないでしょうか。曹洞宗の檀信徒の方々でも坐禅の経験がないという方も多いというのも残念ながら事実だろうと思います。そこでこの『成寿』の紙面をお借りして改めて坐禅というものの今日的意義について解説させていただきたいと思います。

そのためのテキストとしてここでは道元禅師

の『普勧坐禅儀』を取り上げます。大本山永平寺をはじめ各僧堂では、夜坐といって開枕（就寝前）の八時から九時までの一日最後の坐禅において、この『普勧坐禅儀』を雲水たちが一斉に読みあげます。なんともいえぬ荘厳な雲水たちの『普勧坐禅儀』の読誦は、坐禅を組みながら長い一日の修行の最後を締めくくるのにふさわしいひとときです。あの夜の坐禅堂での荘厳な声の響きは雲水たちの修行中の忘れられぬ思い出となっているはずです。

ところで道元禅師は比叡山において出家なされて修行をなさった後、三井寺の門を叩き、さらに臨済宗の栄西禅師が開いた建仁寺にて修行を続けられました。そしてさらに真の仏法を求め、二十四歳で中国に渡ります。諸山を遍参して天童山の如浄禅師の下で身心脱落の体験を経て二十八歳になって京都の建仁寺に戻って来られました。帰国後しばらくこの建仁寺にいらしたのですが、この頃に早速執筆されたのがこの『普勧坐禅儀』であるのです。この書は坐禅の方法や思想について日本で最初に紹介した書物ですが、単に初めてというだけでなく大変深遠な内容となっています。

執筆当時まだ三十にもならない青年僧でありましたが、これを拝読しますと、はたして今の二七ー八歳くらいの僧がこのようなすばらしい坐禅の本を書けるであろうか、と思ってしまいます。今では坐禅に関する本は本屋や図書館に行けば、たくさんあり、それも写真入りで丁寧に説明されています。しかし道元禅師の頃、日本には禅宗が栄西禅師によって伝えられたばかりで、そうしたマニュアルのようなものはまったくありませんでした。そんな状況の中で坐禅の心とその具体的作法をこれほど的確でさらに格調高く表現することができたということに対して驚きの思いを感じざるをえないのです。

二、『普勧坐禅儀』の題目

そこで『普勧坐禅儀』の一文一文を取り上げて解説していきたいと思いますが、まず今回は『普勧坐禅儀』の表題の意味について簡単に説明いたしましょう。この題目は普(あまね)く坐禅の儀則（やり方）を勧める書物ということです。この最初の「普」というのは文字通り誰に対してでも、ということですが、これまで日本では知られていなかった坐禅の仏法を広く天下に示すという意味です。ここに坐禅の仏法が「弘法求生」のため、つまり万人の救済のためであり、これを衆生に伝えていこうとする道元禅師の高邁な理想と信念が伝わってまいります。

ただ、坐禅といいますと、実際には特殊な苦行のように考えられています。うかうかしていると後ろから警策でひっぱたかれる、そんな恐怖心もあることでしょう。やはり基本的には坐禅とは主としてお坊さんたちが修行として行うこと、つまり特別の人たちのためであり、これによって悟れるかもしれない、と漠然と考えられています。しかし道元禅師が本書において、「上智下愚を論ぜず、利人鈍者をえらぶことなかれ」とおっしゃっているように、坐禅という実践について、頭がいいとか悪いとかの能力の差は問題ではなく、すべての人のために普く開かれているという意味が、この表題に含まれているのです。

たとえば頭のいい人であれば仏教の専門的術語をきちんと把握し、『正法眼蔵』のような難しい禅の本を頭で理解できることもあるでしょう。確かに経典や禅の語録に書いてあることは一生懸命辞書を引いてその意味を理解することはできるのです。教理に明るいというのは仏教を学ぶ上でとても大切なことです。しかし経典や禅語録のことばの意味はわかるけれど、それを本当に理解するということ、すなわち体解(たいげ)するこ

と（体でうなずくことができること）であるかというと、私はそうではないと思います。

かくいう私も頭で理解してしようとしてしまう方なのですが、昔、こんな経験がありました。大学四年の頃だったと思いますが、授業で華厳経というお経をケンブリッジ大・オックスフォード大・東大・京大・パリの国立図書館に所蔵されるサンスクリット語写本、そしてネパールから発見された写本など十数点以上を比べながら、さらにチベット語訳や漢文の注釈などもならべて、経文の一節を解釈していました。この写本の文脈と別の写本とは少し系統が違うなどと写本同士を比べて授業で発表していたのです。あるとき大学の図書館ではなく県立図書館でこれらの写本をならべて、腕組みをしていたところ、かなり高齢の方が私を尊敬の眼差しで見つめていることに気づきました。象形文字だかインダス文字だか訳のわからぬ不思議な写本を調べている青年にびっくりしたのだと思います。その視線を受けて私はなにか自分がとても偉くなったような優越感を抱いたのを覚えています。

しかし今から考えると、そのころの自分はまさにペダンティック（エセ学者的）で偽物であったと思います。要するに学問をしているような気分、学者のまねごとのような雰囲気だけだったと感じています。読んでいたのは華厳経でも菩薩の境地の十の段階を順次説く経典でしたが、菩薩どころか、そのはるか下の境涯である私が辞書的な意味だけで理解していました。確かに言葉としてはなにをいっているのか理解できます。しかし理解していても本当に理解していたとはいえないのではないかと思っています。

『般若心経』というお経もそうでした。これも大学二年のサンスクリット語をならった年に読みましたら、最初の印象はなんて短くて簡単なお経だろうと思ったのです。それまでのイン

ドの梵文は難しすぎて泣きたくなるような日々でしたが、一年間の最後の授業で読んだ『般若心経』は文章構造が非常に簡単だったからです。しかし経文の中にある「色即是空」「空即是色」「不生不滅」「無眼耳鼻舌身意」などのことばは、ことばを置き換えただけで上っ面でしか理解できなかった、いや本当は理解できなかったと思います。その後私はもう十年くらい続けている朝日カルチャーセンター横浜の講座で三回くらい『般若心経』の講座を開いているのですが、わずか二六八文字くらいの経なのに、講座で取り上げるたびに私自身の中に新たな深まりを発見するのです。

何年か前に小説家の立松和平さんが駒沢女子大学に来て道元禅師の『正法眼蔵』の講演をされたのですが、立松さん自身が『正法眼蔵』への理解が年代を経るにしたがって、変化し深まっていくことについてこんなエピソードを紹介されました。

あるとき立松和平さんがロンドンの広大な森林公園で行けども行けども森で、道に迷ってしまい、今自分がどこにいるのかわからない。やっと見つけた案内板に、地図があり、そこに赤い印があって「You are here」、おまえはここだと書いてある。そしてまたずっと先へ行くとまた看板があって同じように「You are here」。その赤い印が先ほどより少しずれている。つまり自分がどちらへどれだけ移動しているかがわかる。そのときふと感じるものがあったそうです。我々は人生において自分がどこにいるかわからず、公園の地図のようなものはないけれど、『正法眼蔵』を通じて自分の成長がみえてくる。『正法眼蔵』は自分の人生の地図のようなものであり、古典とはそういうものではないか。そんなことをおっしゃっていました。

『般若心経』や『正法眼蔵』は一文字も変わ

りません。しかし自分が経の心を受け止めるアンテナが立つと、はじめてその本当の意味が見えてくる、同時に自分の成長が見えてくる、そうものが古典なのだと思います。

さて改めて『普勧坐禅儀』の表題について戻りますが、最初に「普く」という一文字は、第一に天下に坐禅を示すという意味であると同時に、人の性別や能力などの差にかかわらず、尊い行いであることが意味されています。長い間日本・中国での坐禅修行を経て、仏道を歩むことの厳しさを身にしみて体験なさった道元禅師が、敢えて「普く坐禅の儀を勧める」とおっしゃっています。それは人生の苦しみに対して正面から向き合って歩む人のために、本来の面目（本当の自己）を見出すために一番具体的でいい実践方法であることを宣言することであったと思います。学問として理解する仏教ではなくて、体解する仏法、全人格で受け止めていく仏道がこの『普勧坐禅儀』に開示されているといえるのです。

国際
レポート

前角インスティチュート

大圓武志大和尚の実兄でもある、前角博雄老師がアメリカの地に渡り禅の教えを伝えて四十五年。その教えをもとに、この春マサチューセッツ州ハートフォードの郊外に広がる緑豊かな森の中に、前角インスティチュートがオープンされました。

オープニングセレモニー

世界中の弟子たちと宗門の関係者が参集し、前角老師のご命日である五月十五日にオランダゼンリバーの天慶老師や北アメリカ国際布教総監秋葉老師も列席の中、追悼供養とともに「MAEZUMI INSUTETUTE」のオープニングセレモニーが挙行され、善光寺からは黒田博志住職が光真寺住職黒田俊雄老師、東京桐ヶ谷寺住職黒田純雄老師らとともに参列しました。

インスティチュートの理念は①禅の研修と学術研修、②平和運動、③ソーシャルエンタープライズの三つ。新開地にはすでに禅堂を中心に必要最小限の施設が整い、山の各所に予定されている建物の杭があちこちに立ち並んでいます。

前角老師の供養　徹玄老師宅にて

博志住職は、先代住職黒田武志老師の発願の心、「横浜善光寺留学僧育英会」の原点を感じた、とその想いを寄せています。

（右から）前角老師夫人・次女と

本寺・黒田老師ごあいさつ

パネルディスカッション

前角インスティチュートの本尊様

広大な敷地をもつMAEZUMI INSUTETUTE

ドイツ普門寺

成寿第三十四巻でも特集されましたドイツ普門寺において、この度開創十周年慶讃報恩法要が執り行われ、また、故大圓武志大和尚が寄贈させていただいた観音菩薩・地蔵菩薩の開眼法要が執り行われました。

十年前、ドイツ南部のアルプスの山並みの麓、アイゼンブッフの地に大悲山普門寺・アイゼンブッフ禅センターが建立されました。この九月八日から九日にかけて、普門寺では開創十周年慶讃報恩法要と中川正壽主監の晋山式、首座法戦式などの記念行事が行われ、横浜善光寺からも黒田博志住職、山口晴通老師、檀家総代東郷敏氏が訪ねました。

この普門寺・アイゼンブッフ禅センターは海外布教を志して二十七年前に単身ドイツにわたった中川主監が世界に通用する禅センターを開設するために、平成八年に開所したもので、海外寺院には少ない永平寺の直末寺院となり、平成九年に入仏開眼法要を厳修しました。

開山にあたっては善光寺先代住職黒田武志老師が大本山永平寺の宮崎奕保貫首に拝請した経緯がある他、仏具や法具、仏像な

大圓和尚の遺影を掲げる山口老師

ども寄贈しています。また、今回は武志住職が生前に約束していた聖慈母観音菩薩と子安地蔵菩薩の石像二体が境内に建立され、その開眼法要も大本山総持寺講師・小田原成願寺住職、山口晴通老師の導師で執り行われました。

現地だけではなく日本からも多くの関係者が参列した晋山式では「ドイツ普門寺国際友の会」の会長である前駒沢大学総長、奈良康明氏が慶讃法話を行い、また、副会長である泉岳寺住職小坂機融老師が西堂を、前永平寺監院の南澤道人老師が僧堂開単式と開山御真像開眼法要の導師をつとめられました。

須弥壇に登座した中川主監は一仏両祖ならびに伝燈歴代諸大和尚に報恩香を捧げるとともに、開山・旃崖奕保大和尚と善光寺二世中興大圓和尚の慈恩に報いて報恩香を焚かれました。

菩薩像の開眼法要

（左から）黒田博志住職、東郷敏氏、山口老師、中川老師

〈国際レポート・アメリカ〉

前角インスティチュート オープニングセレモニーに参列して

善光寺住職　黒田博志

私は師父大圓和尚の予期せぬ遷化により、横浜善光寺を引き継ぎ住職の拝命を受けました。善光寺を一時はどのように引き継ぎ発展させればよいのか、ただただ無我夢中でした。さいわい師父はあらゆるポジションに多くの立派な人、人材を残してくれました。お蔭で寺にはなにもなかったように滞ることなく今日にあること、全く師父の余徳と感謝しています。

さて、いただいたテーマは「前角インスティチュート」。師父の実兄、私の伯父、前角博雄老師は、今より四十五年前単身渡米、欧米人対象の禅の開教に従事、以来初めて日系人社会以外の人々に禅を伝えました。遷化された時点の弟子は、印可一名、嗣法の弟子十二名、得度者五十余名。弟子たちは世界各地に布教を展開し、かかわる禅センターは二十三箇所、禅の拠点は

すでに百箇所を超えています。

徹玄老師と前角老師の出逢いは一九六三年。グラスマン氏はロサンゼルス禅センターを初めて尋ねたが、ちょうど前角老師は留守中。そこに対応したのが、私の師父大圓和尚（当時開教師）であったそうです。その日、その時から二人は意気投合、以来一緒に坐禅に没頭し、いつしか前角門下として身を投じていました。その後の活動は多岐に亘ります。

前角老師遷化の後十二年、前角老師によって蒔かれた仏種は地中深く根をおろし、時を得て今勢いよく芽をふき、萌えだしました。その中核をなす普及拠点がマサチューセッツ州ハートフォードの郊外に広がる緑豊かな森の中、現在は四万坪の大聖地。この場所に、世界中の弟子たちと宗門の関係者が参集し、前角老師のご命日である五月十五日にオランダゼンリバーの天慶老師や北アメリカ国際布教総監秋葉老師も列

席の中、追悼供養とともに「MAEZUMI IN-SUTETUTE」のオープニングセレモニーが挙行されたのです。

インスティチュートの理念は①禅の研修と学術研修、②平和運動、③ソーシャルエンタープライズの三つ。新開地にはすでに禅堂を中心に必要最小限の施設が整い、山の各所に予定されている建物の杭があちこちに立ち並んでいます。

「前角インスティチュート」の在り方は明らかに日本曹洞禅とは現象面においていささか異なるように思います。十年前、アメリカ禅の事情を具に観て歩いた、師父と東隆眞学長（現大乗寺住職）は「アメリカ禅の拠点ではどこでも禅を深く学び、専門道場で徹底した只管打坐、禅参サンガを形成しながら坐禅の修行は欠かしていない。ひとつには自己の真実性を学び、ひとつには現在アメリカ社会に貢献（或いは世界規模）する福祉活動である。いま世界が病み、

生き方の根本的矛盾を解決し、人心救済をしようとする機能は、道元禅師の教えに従っており、アメリカの禅こそ、はじめて歴史的、社会的存在となって、人々に『生きる力』を与えようとしている」と結んでおります。今まさに「インスティチュート」に具現化しているように思いました。

私はこのオープニングセレモニーに参加して、法要に臨んだ時、師父大圓和尚の発願の心を読むことができたように思います。「横浜善光寺留学僧育英会」の原点がアメリカにあった。育英会存続のプロセスを見る時、半端でない師父の「生き方」と「徹し方」。到底、私はマネをしたくてできるものではありません。しかし、私には与えられた使命をしっかり受け止めて発展させる義務があることを強く感じています。

師父大圓和尚が抱き続けた夢と希望を追いながら、「前角インスティチュート」を離れ帰国の途に着きました。

〈国際レポート・ドイツ〉

開眼法要の記

大本山總持寺講師　山口晴通

平成十八年九月十日、ドイツ・アイゼンブッフの大悲山普門寺におきまして、中川正寿主監の、住職就任式が挙行されました。

これに先だち、先代方丈さまは、中川主監に、心温まる祝意を表されると共に、普門寺さんのために、数々の仏像をご寄進なされました。

その中に、子安地蔵菩薩と聖慈母観音菩薩と二体のご尊像がありますが、誠に残念ながら、この二尊菩薩の開眼供養（所謂、魂入れのご供養）を果たされることなく、平成十六年十二月二十九日にお亡くなりになられました。

したがいまして、二尊菩薩の開眼供養の導師は、現在の善光寺方丈さまが、挙行なされて当然であります。

しかし、方丈さまはご謙遜なさって、先代方丈さまに代り、私に開眼法要の導師をせよとのご依頼がありました。

そこで不肖、私がお務めさせて頂いた次第です。その折、お唱え申し上げた「奉読文」は左記のごとくです。

開眼供養香語

山門此の日
大悲山普門寺晋山上堂の吉辰
謹んで　子安地蔵菩薩　聖慈母観世音菩薩の
開眼法要を厳修せんと欲す
省みれば　右二尊菩薩は
善光寺二世中興大圓武志大和尚
普門寺の仏法興隆禅風挙揚を念願して
親しく当山に寄贈せる者なり
今ここに
善光寺現住博志高和尚に随い
先住大和尚に代りて　その生前中　賜りし数
珠を奉持し、かつ
先住大和尚愛用の九條の袈裟を拝借し
二尊菩薩の開眼法要に臨まんと欲す
伏して願くは
大圓武志大和尚

真寂定中　此の盛儀を照覧せられんことを
這裡　慶讃底の那一著　如何んが敷宣せん
咦

萬里縁を開く無尽の願い
二尊の菩薩三千を照らす

尚享

（原漢文）

平成十八年九月十日、ドイツ大悲山普門寺晋山式の吉日にあたり、私は、子安地蔵菩薩と聖慈母観世音菩薩の開眼法要に望まんとしております。
省みまするに、右の二尊菩薩は、善光寺二世中興大圓武志大和尚さまが、ドイツにおける普門寺の仏法の興隆と、禅の発展を願って、親しく寄贈なされたものです。
今ここに私は、現住博志方丈さまのお伴をして、ご先代方丈さまの代りに、ご生前中に頂戴した数珠をかけ、また、先代方丈さまが特に愛用なされた、尊いお袈裟をお借り申し上げ、
二尊菩薩の開眼法要に臨まんとしております。
どうか、
先代方丈さまには、この素晴しい儀式の模様を、はるか兜率天の世界よりご覧下さいますように。
この式典にあたり、私は、もはやこれ以上の言葉はありません。
結びにあたり、詩の断片をもって、私の気持を表現させて頂きます。

広く万里の彼方にまで、ご縁を開かれた、
先代方丈さまの、偉大なるご誓願と共に、
二体のご尊像は、普ねく三千世界を

照らし給うことでしょう。

（原漢文の抄訳）

この日、空には一片の雲もない好天に恵まれ、多数のご寺院さま、内外ご信徒の皆さまに見守られながら、式典を無事に円成することができました。

善光寺方丈さまをはじめ、関係各位の皆さまに厚く御礼申し上げます。

有難うございました。

成願寺　合掌

ドイツ訪問記

大倫の花

東郷敏

諸人のご恩うけてぞ　この日あり
報わらざらめや　いのちのかぎり。

このうたに誘われ、私もドイツに飛んだ。恰好のいい表現ではある、しかし実際はカバンもちだった。善光寺ご住職と成願寺方丈さまのお二人。事情は善光寺先住方丈さまがご生前、殊の外親交の篤かった欧州屈指禅センター。中川正壽主監の普門寺開創十周年。慶讃法要と主監晋山開堂慶事へのご案内、先の詩は本年二月善光寺へ届けられた一通の招聘状、その文面より借記す。拝見すると出席しない訳に参らぬ内容、新命住職晋山結制式典後半に善光寺より御贈りした釈迦如来ご本尊さまとほか三体の仏像に加え、さらにご存命中先代方丈より届けられている。聖慈母観音菩薩と子安地蔵菩薩、石像二体の開眼法要も相合わせ、現住方丈主導のもと同時進行したい旨示されている。

この式典には大悲山ご開山大本山永平寺不老閣猊下とその名代をはじめ、全国数十ヶ寺より大多数のご参列、さらに欧州、米国、日本中の高僧、仏教学者のご随喜ご尊宿も予定されている旨添えられている。本山と宗派をあげての慶

讃の様相。大層なこと、この状況よりなにかと推察すれば、横浜善光寺などいづれとっても新参、『枯木も山の賑わい』数の中、せめて先住方丈さまご存命なら随喜の涙もあろうにと貧しい申し上げようではありますが、果たしてドイツまで馳せ参ずる価値があるものか、この時点では知る由もない。

さていかがなものかと現住方丈に進言したことも懐かしい。現住方丈さまもさもありなん、しかし「礼は尽くしたい」やはりアイゼンブッフに参りましょう、開眼供養には最高の香語と懺法にのっとって尽くしたいものです。ために私では未熟が過ぎています。斯くなる上は先住方丈に最も信任の篤い成願寺方丈さまにお出ましいただきたい。さすればこの最善こそ先住方丈の悲願に叶うことだと思います。やがてご両僧ドイツに赴く。

ではなぜドイツなのか、普門寺なのか、また晋山開堂なのか、ここのところ些かでも説明がなければ付き合っておられません。先住方丈がどんなにグローバリズムなグローバリストだと謂うても、日野中央とは繋がらない。

このところ二〇〇二年ご遷化の二年前、成寿34号にDOGEN2002・七五〇回大遠忌ドイツ記念セミナーの講師として招かれ、そのレポートが具に記録されておりました。その延長線上にこの記念行事が再現されたことによります。

少し余談になります。現住方丈は二〇〇〇年に横浜善光寺継承者として承認され、書類上は第三世住職として命されている。

以来僅か四年の間、先住方丈は自ら踏んだ道を第三世に求め、大本山永平寺をはじめスリランカを経て、タイで上座仏教に得度。仏教伝来の中国を歩き、アメリカ本土は西から東までの寺院に行脚の足跡を印す。さらには欧州キリス

ト教圏の歴史に学び、やがてこの巡行コースもドイツで佳境を迎え、禅センター普門寺で修業中、いみじくも師父大和尚の健康に異変が生ずる。とりあえず検査入院のはずだったが驚愕。すでに命、旦夕に迫っているとの診断。既に時間の問題だと告知されているのに、それでも元気印にさほどの変化はない。しかし猶予はならない、子息現住方丈は二〇〇四年六月ドイツ普門寺より帰国を余儀なくされ、それから六ヶ月後、ついに永遠の別れとなってしまった。

この四年間、あまりの性急に、なぜ急ぐのですか、なぜ急がすのですか、となんど、交わしたことなのか、都度に『オレには残された時間が微ないのだヨ』うそではなかった。この経緯と因縁、人のいのちと数奇な運命に天空からの示唆と不可思議さを感じずにはおられません。現住方丈が辿った道のりは、奇しくも善光寺留学僧育英生が辿った道。先住さまご遷化で休会中の育英会も、再開の目処順々と迫り、現住方丈の晋山式も待たれるところ。

仏種一粒大地に大輪

さて本筋に。九月六日ドイツアイゼンブッフ大悲山へは、東京永見寺さまが先導する『アスパラ・クラブ観音懺法ツアー』に同道。全国から十ヶ寺十八名の高僧御代表さま、普門寺門前は各地・各国より侶団が大挙押し寄せ、大悲山はさながら僧侶方の山と化す。私的に申し上げるならこの威容、異様としか映らない。

各種記念行事は山奥のアルプス丘陵地、大自然のいただきに三日間に亘る。ドイツへの旅とは名のみ、山に籠ったきり、俗界代表には、どうにも堅苦しい旅になってしまった、唖々。従うよりすべがない。さらに現住方丈のたまわく、期間中私は新参中の新参、裏方として過し、多分表には出られません。東郷さん写真など期待

しないでくださいと言われる。主のいない法要など無意味だと思っている。本当にガッカリする。ここまで来てそれはないでしょうとは腹に思うだけで口にはしなかった。

大悲山は荘厳な鐘と太鼓に彩られ、順々と執り行われてゆく。お釈迦さまが蒔かれた、八万四千種の種子一粒が、いまこの大地に発芽した瞬間でもある。そして大輪の花開く。

本来この地は、カソリック教徒の領域であり牙城、仏教徒に俄か変身した白人の面々、聞き入り見入って陶酔の境地。さても法要の大事な役どころ、すべて白人僧侶が担っている。私は成願寺さんに申し上げた。此処は外人ばかりですネ、跳ね返った成願寺さま。トーゴさん、ここではあなたがガイジンですヨ。ハァー。

さて路々、家々の軒先や玄関に花や幟が飾られている。今日という日を祝福いただいていると思い込んでいた。ところが祝う相手の違うこ

とを知らされる。なんと当地カソリックの大本山バチカン宮殿の主、第十六世、ベネディクト現法王の出身地だという。丁度この日、この時、法王は故郷に錦を飾り、近くの教会で礼拝中とか。ドイツはもとより、世界中がいまここに注視している点(ピンポイント)の位置だった。(ここまでの道のり、ものものしい警護、従って、一里の道も五里) 歴史的瞬間に遭遇したことになる。

多分十年前、この土地柄、宗教的宗派的に最もきびしく排他的環境予想だにされなかったものと思う。途中困難あったことも、垣間見える。しかし今日の慶事、近隣の市長、近く教会の司祭より祝詞が届いている。新命方丈さまのご人徳なのだろう、社会的認知も言わずもがな。人心を救うになんの遠慮がいりましょうや。

先住方丈さまと中川主監との出逢い。十数年前、偶然が重なり、めぐり逢うべくして出逢っ

たという。ご苦労の最中、草創にて意気投合先住方丈自身が〇からの出発をしただけに、寺づくりのむづかしさ、過程でなにをすべきか、なにが必要か、方向を共有しながら、基本中の基本。御開山を原点に求め、不老閣猊下をご開山さまに拝請。寺の形を整えつつ指向する内外の仏具、法具、仏像等とり揃える。さらに十周年を目指す。晋山式へと手配済みの菩薩像二体。このところ大圓大和尚、遥か極安楽世界より確認されたようです。実のところ現住方丈さまも、檀家役員もこんなところまでは承知していない寄贈の数々。時としてムダ使い。浪費ぐせの権化みたいに言上したり思ったり。しかし聖地で中川主監さまより具に伺い、半端でない在り方、唯々敬服、感服、改めてこの尊い犠牲心に感泣する。いかにも『自未得度先度他の心』身を削り、人に尽くさんスリコギのその味、知れる人ぞ大圓武志大和尚。唱えるだけではなかった。

嗚呼!!

一筋の光燦然

晋山開堂の冒頭　須弥壇上に登座する中川主監、一仏両祖、歴代大和尚さまに報恩香を捧げたのち。

横浜善光寺二世中興大圓武志大和尚さまのためにと報恩香を焚き、感謝報恩の誠を捧げ尽くすと高らかに心情を吐露されたとき、私は耳を疑ってしまった。ここは遥かドイツなのだ。突然先住方丈さまの存在と霊魂が蘇った瞬時。私は矢庭に現住方丈を探した。会場におられるはずはなかった。ところがなんと須弥壇のもとに坐しておいでではないか。新命中川主監の御心遣いはいまその子に報いて下さっている。いま座している位置は現住方丈の居る処ではない。名代をつとめる現住方丈さま、胸を張りピーンと背すじを伸ばしマコト堂々たる哉、須弥壇を

凝視する。目は潤み充血に濡れている。キットウ父大圓武志大和尚もありがとうアリガトウ有難うヨと。

時に私は思う、新命さまがここに至るまでどれだけ多くの方々のお力添えがあったのか、想像を超えている。善光寺先住さまと中川新命方丈さま、共にあい教えあい導かれて網のごとく、縁に結ばれし、このお二人、いまドイツの大地に壮大な曼陀羅の図を画いた刹那でもあろう。

花ひらく時蝶来たり、蝶来るとき花ひらく。いかにも啐啄同時。心魂の世界。

最終日、すべての行事の締めくくり、全員参加の号令が裂く。大悲山普門寺の玄関口、この三日間空には一点の雲もない青天上。菩薩像の前に設えられた三方。その中央に大圓武志大和尚さまの遺影、現住善光寺方丈の懐(ふところ)に抱かれてきたおまもりである。新命さまにお供えのお許

しをいただいて鎮座升す。相合わす観音・地蔵大菩薩像。大本山總持寺講師成願寺方丈さま導師による開眼法要。介添える現住方丈。ドイツの信徒も、日本より馳せ参じた諸人も、合掌低頭相身互い。美事な香語と読経に酔ひしれる。菩薩さま　どうぞ衆生に救済を。今日よりのちは我をこそ、冥途の親と思うべし。一瞬、天空より降り注ぐ一筋のひかり燦然。

吉祥　吉祥　大吉祥。

盂蘭盆会法要法話

心の器、身を調える

曹洞宗関東管区主監・栃木県明林寺住職　西田正法老師

平成十八年七月、善光寺では恒例の「盂蘭盆施食法会」が午前十一時と午後二時の二回にわけて行われました。明林寺住職で曹洞宗関東管区教化センター主監の西田正法老師のご法話に、日頃の生活のなかでの信仰のあり方について、改めて考えてみる機会をいただきました。

お唱えの持つ力

只今皆さんに「三帰依文」をご一緒にお唱え頂きましたが、見事なお唱えでした。お世辞で申し上げるのではありません。法話の前には、何処の会場でも必ずこの三帰依文をお唱えして頂くのですが、第一声からこれほど見事に揃うお唱えに出会うことは滅多にないことです。

「段々良くなる法華の太鼓」ではありませんが、一度目はお互いに様子をみながら、二度目で何とか揃いだし、三度目でやっとお唱えらしくなる、というのが一般的です。

今日ここにお集まりの皆さんが、本日の法要に真剣に臨まれていることがヒシヒシと伝わって参りました。お唱え中、「これだけのお唱えが出来るなら今日はお話をしなくてもいいな」と、思った程です。信心決定という言葉がありますが、皆さんの一途なお唱えに、この「信心決定」揺るぎなく定まった信仰心を感じました。

さて、心は目に見えません。私達の信仰の心も目には見えない。その目に見えない信仰心を表明するのが、手を合わせる、拝む、礼拝する、或いはお唱えや読経という行為です。信仰を自らの体で表現するのです。

以前、或るお寺にお説教を頼まれてお邪魔したのですが、ご本堂に入りきれないほどお参りの方があって、境内に大きなテントが張られ百人近い人達が本堂に向かってお座りでした。そして、外部用のスピーカーを通して実に上手なお話の声が流れているのです。満座の聴衆は楽

しそうに話に聞き入り、時々大声で笑うのです。境内に入った私に気付く人などありません。私は、一時から法話とのご依頼を受けていたのですが、既にどなたか相当な方がお話をされているのです。「妙だな?」と思いながら庫裏を訪ね御住職に伺ったところ、「例年、法話の前に余興として落語家さんに一席お願いしている」とのことでした。

スピーカーから、「それではお後が宜しいようで」との声が聞こえ、落語家さんと交代で私がご本堂へ。ご本堂に入って驚いたのは、その場の空気でした。一時間近くプロの落語家さんが講演した直後の空気は、笑いの余波がそのまま残っていて堂内の空気そのものが渦を巻いているようで何とも陽気というか、厳かさに欠けていたのです。「とても、お釈迦様の教えをお話しする雰囲気ではないな」というのが、率直な感想でした。

だからといって逃げ帰るわけにもゆきません。覚悟を決めて「三帰依文」をお唱え致しました。するとどうでしょう、僅か三、四分前の雰囲気が嘘のように、渦巻いているように感じた空気は、水を打ったように静まっているではありませんか。

昔から、お説教の前に「開経偈(かいきょうげ)」や「懺悔文(さんげもん)」そして「三帰文(さんきもん)」をお唱えしてきた意味が歴然としました。お参り下さっている皆さんが、自らお唱えすることによって、自らの心のチャンネルを仏様に合わせるのです。僅か五分足らずの時間ですが、姿勢を正し、左右の掌を隙間が出来ないようにピッタリ合わせ、口に「三帰依文」を唱えることで、心の有り様がガラッと変わるのです。私自身、頭では分かっていたことですが、かくも効果が覿面(てきめん)であることに大変驚かされました。一人や二人の人が変わったのではなく、ご本堂の中、更に屋外のテントの中の

雰囲気がすっかり変わってしまったのです。満座の人々の心のチャンネルが、笑いから法話の周波数に合わされ、仏様の教えを受け入れることが出来る状態になっていたのです。

功徳（行いによって現われ、身につく功（はたらき））

福井県の浄土宗のお寺で、一日五時間半に及ぶ「経典講座」の講師を仰せつかったことがありました。午前九時開講と聞いておりましたので、八時半前にお邪魔致しましたら、既にご本堂では「南無阿弥陀仏」のお念仏が始まっておりました。「もう、お勤めをされているんですか？」との私の問いに、「八時からお勤めをして頂いております」と、御住職。「今日の『経典講座』とは関係ないのですか？」と私。「いえ、いえ、先生のお話を聞くために一時間ほどお念仏をして頂いているんです」と、当たり前のように住職

さんがお答えになられました。

浄土宗では、私達曹洞宗と違い、お話をする僧侶はご本尊様をお祀りしている内陣から聴衆の前に姿を出すのです。つまり、聴衆はお説教をする僧侶を阿弥陀様として迎えるわけです。阿弥陀様としてお迎えする為に一時間もお念仏し、自分の心を阿弥陀様に合わせてゆくのだそうです。この日は、永平寺からやって来た私、西田を他宗の僧侶にも拘わらず、合掌しお念仏を口に唱えながら、阿弥陀様としてお迎えして下さったのです。

更に驚いたことには、講話の内容が大事な処にさしかかると誰ということなく「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏…」と、手を合わせて唱え出すのです。最初は戸惑いましたが、慣れてくると話し手にとっても実に調子が良いもので、熱が入るんですね。聞き手の勘の良さというか、法話を聞く耳の素晴らしさに驚嘆致しました。

これも、お話を聞く前に「南無阿弥陀仏」と一時間お念仏をお勤めして、心を仏法に合わせていればこそ可能なことなのではないでしょうか。

ご利益と同義に使われる言葉に「功徳」という言葉がありますが、正にお念仏の功徳だと思います。功徳とは、自らの行いを仏様に合わせることによって、心のはたらきも仏様にピッタリあってくることです。仏行によって仏心が現われるのです。仏様の徳が功きだすのです。

「今日は、法話も聞いて、ご先祖さまの御供養もしたし、きっと功徳があるだろうから宝くじでも買って帰ろう」なんて考えても駄目ですよ。そういう功徳はありませんから。

身と口と心と

一般的に「心身」と言いますが、仏教では、「身心一如」という言葉でも分かるように、身と心の順番が逆になります。心は身の処し方、つまり、心の器である体をどう使うか、口にどのような言葉を語るかで心の状態が変わってくると観察したのです。ですから身を先にします。坐禅が端的に表しているのですが、坐禅はお釈迦様のお姿をそのまま頂いているでしょ。

皆さん、ご家庭の中で覚えがありませんか。朝食の時間、ご主人がお味噌汁を一口すすって「おい！　味噌汁がしょっぱいじゃないか、血圧高いんだから気をつけろよ！」と。売り言葉に買い言葉「しょっぱかったらお湯で割ればいいでしょ！　大きな声出して、威張るならもっと稼いでからにしてよ！」と、奥さん。段々エスカレートして、しまいに言わなくてもいい事まで言い出す。「何よ、あたしだって好きであんたと一緒になったわけじゃないのよ。好きな人に振られて自棄であんたなんかと一緒になっちゃったのよ」と。まあ、こんなにひどいことはない

でしょうが、「売り言葉に買い言葉」、多少身に覚えはないですか？

これも、口に出す言葉からもたらされる心のはたらきです。同じ口で「三帰依文」を唱えると心が落ち着き、乱暴な言葉を口にすれば益々心がささくれ立つのです。

「味噌汁がしょっぱい」と言われたら、「あらっ、御免なさい。あなた最近お疲れのようだったから、ちょっとお味噌多めにしてみたの」と言えば、「ああ、気を遣わせて済まないな、お湯を入れるから大丈夫だよ」となります。言葉一つの使いようで、お互いの心持ちがまったく変わるのです。

お釈迦様は、人間の全ての行いを、身と口と意に分類して「身・口・意の三業」と説かれました。口も体の一部なのに、口で語る言葉を身と分け、心を表す言葉なのに心とも別にされました。これは、実に深い人間観察だと思います。

最近、若者の言葉が大変乱れています。「ウザイ、ウザッテー」「ムカツク、チョームカツク」「キモイ」等々、管理された社会の中で遣り場のない気持ちが生んだ言葉なのかも知れませんが、「口業」という立場で見ると大変危険であることが分かります。

「ムカツクんだよー」という言葉では、何故ムカムカする程腹が立つのか自分の気持ちが整理されないのです。「俺だって悩んでいるのに、次から次へと言われたらどうして良いか分からずに、イライラするじゃないか。少し自分で考える時間を頂戴よ」と言えば、多少乱暴でも相手にも気持ちが伝わるし、自分が何故腹が立つのかも分かります。ところが、「ムカツクんだヨー」の一言では相手に気持ちが伝わらないばかりか、自分自身の心さえ分からず、乱暴な言葉を発することで感情は更に高揚し、次にくるのは暴力や反社会的な破壊行為になってしまいます。乱

暴な言葉によって心は更に乱れ行為は凶暴なものになってしまうのです。身口意の三業とは決して別物ではありません。相互に深く関係しあっているのです。だから、身心一如なのです。

因みに、「業」とは身で行ったこと、口で語ったこと、心で思ったこと、それらのことが蓄積されて自分自身の人となりを形成してゆく力のことです。身口意の行いは、場面場面で消えて行くように感じられますが、習慣力となって蓄積し、自らを為したような自分として作り上げて行く、その力を業と言います。皆さんも、「善因善果・悪因悪果」という言葉をお聞きになったりご自身使ったりしておいでかと思いますが、この言葉は業という力をよく表しています。善悪というと、私達はつい道徳的善悪や法律や倫理を基準に考えがちですが、仏教の説く善はお覚りを開かれたお釈迦様の御人格に近づくことであり、またその為に説かれた教えを実践する

ことです。悪は、お釈迦様から遠ざかること、お釈迦様に背を向けた行動に走ることです。

「お釈迦様の教えを守って生活しているのにちっとも給料が上がらないじゃないか、善因善果なんて嘘っぱちだ」と考えるのは、仏教が分かっていないからです。善い結果が現われるというのは世間的な価値ではありません。仏教の教えに適った人格を得るということなのです。仏教は性善説も性悪説も採りません。ただ自分の行いによって善ともなり悪ともなる、と説くのです。体で何を行い、口にどんな言葉を語り、心で何を思って過ごすかで自分を形作っていく、それが「業」というものです。

だからこそ、行為や言葉を大切にしなければなりません。立ち方、歩き方、食べ方、座り方、話し方、日常の一挙手一投足が、一言一言が自分を形作ってゆくのですから。この仏教の教えに照らしたら、コンビニエンスストアーの駐車場に座り込み、飲み物や食べ物を広げていてはいけないのです。口を開けば「ウザイ、キモイ、ムカツクー」としか語らないようでは大変なことになるのです。

形のない心だからこそ形に表す

心そのものには形はありません。見ることも見せることも出来ません。しかし、形の無い心ですが形に表れますよね。言葉や態度にその人の心を見ることが出来ます。逆にコロコロと定まり無く変化し形を持たない心に形を与えることも出来ます。それも言葉や態度です。誤解しないで下さい。何も言葉や態度で人を騙そうという話ではありませんよ。私達は誰だって毎日を安心して過ごしたいと願っています。でも、そう願いながらも悲しみや不安に捕らわれたり、思い通りにならない現実に苛立ったり苦しんだ

りしているのではないでしょうか？　その心を、安心させてくれるのが信仰や信心です。心を信心信仰の中に修めるためには、言葉や態度を信心信仰の形にしなければなりません。

福井県の永平寺を開かれた道元禅師様に、「礼拝」と題されたお詠（うた）があります。

冬草も見える雪野のしらさぎは
をのが姿に身をかくしけり

礼拝とは、お釈迦様への帰依を形に表した姿のことで、「五体投地」と言って両手、両足、そして額を地に着け、五体を投げ出した形で、両の掌にお釈迦様の両足を戴き自らの頭の上に掲げるのです。自分の額を大地に着け、大地を踏んでいたお釈迦様の足を頭上に掲げる行為は、何を表しているのでしょう。

顔や頭というのは、実は私達の我（が）の象徴です。俺が、私が、のガです。だから、「頭ごなし」とか「顔が立たない」とか「頭を押さえる」というように、自分が中心になれない時に使うでしょ。その顔を大地に着けお釈迦様の足を頭の上に掲げるのですから、「全てお釈迦様にお任せ致します」との気持ちを全身を投げ出して表すのです。手を合わせるのも、お釈迦様と自分を一つにする事です。それを行うことで、心もそのようになるのです。

白一色の雪原に舞い降りた白鷺は、自らの白い色によって大地と見分けがつかない。との内容のお詠ですが、礼拝というものが自我を出さず仏様と同化する行いであることを見事に読み込んだお詠ですね。

では、ここで具体的に考えてみましょうか。今日、法要も済んで、皆さんが家に向かう途中で雨が降ってきたとします。家に着くと網戸のままでサッシが閉まっていない。ついお嫁さんに腹が立って「あなた何してたのよ、湿気が入るでしょ」と、つい先ほどまでご先祖様のご供

養をして清々しい気持ちでいた心は何処へやら、お嫁さんが「エアコンをドライにすれば済むことでしょ」などと言ったらもう大変です。そんな時、カチンと来たのをグッとこらえて、先ずお仏壇の前に座ってお線香を立てて、「行って参りました」とご先祖様に報告したら、カチンと来た気持ちは綺麗に消えて清々しさが戻って来ます。もし、雨が降って、家のサッシが開いていたら試してみて下さい（笑）。

私達に安心をもたらす信仰は、ちゃんと形にしないと駄目なんですね。

七転八起お達磨さん

縁起物で知られる七転八起（しちてんはっき）の達磨さん、選挙になると必ず登場する起きあがり小法師の達磨さんです。皆さんよくご存知ですよね。あの達

磨さんが七転八起の縁起物となっているのには、大変大事な意味があるんです。

そもそも達磨さんのモデルは、インドから中国に坐禅を伝えて下さった達磨大師、菩提達磨大和尚なのですが、極寒の崇山少林寺で頭からスッポリ被をかぶって坐禅している姿を象ったのが達磨さんになっているのです。足を組み、手を組んで坐禅している姿です。手も足も出ない、ではなくて、手も足も出せないのです。背骨を地球の真ん中に真っ直ぐ立てて、右にも左にも傾かない。つまり、こっちが得だ、あっちが安い、これは儲かる、あれは損だ、と右往左往しないのです。そして、前にもくぐまらず、後ろに仰ぐこともない。つまり、卑屈になって落ち込むこともなく、大きな気になって尊大にならないということです。坐禅は姿勢が調ったら、息を調えます。息という字は自らの心と書くでしょ。丹田息、そう複式呼吸です。私達が活動している時は胸式呼吸ですが、心と体を安定させるには複式呼吸が良いのです。だから、私達は無意識のうちに睡眠中は自然に複式呼吸をしているじゃないですか。坐禅は心を表す息を意識して複式呼吸にすることで、頭に上っていた血を下げるのです。すると、あの起きあがり小法師の達磨さんのように重心が下に下がり安定します。重心が下にあるから、転んでも転んでも起きあがれるのです。七転八起の所以です。私達は、困難に出逢うとつい考え込んでしまい、頭に血が上ってしまいがちです。頭に血が上って熱くなってしまったのでは、転びやすく、また起ちあがることも出来ません。そんな時こそ、姿勢を調え息を調えて、あの達磨さんになるのです。そう、七転八起の、必ず起きあがることの出来る達磨さんです。怒りや激情に駆られた時、悲しみや苦しみに出逢った時、達磨さんを思い出して真似して下さい。心は、心

で調えることは出来ないのです。常に流動的で形の無い心を、形の無い心で制御しようとしても不可能です。「水は方円の器に従う」と言うでしょ。形の無い水は、四角い器に入れれば四角く、円い器に入れれば円く収まるのです。心の器である体を正しく調えることが、心を正しく調え安心安定を得る道なのです。

悲しみ苦しみを超える道

今日、この法要にお集まりの皆さんは、どなたもお身内を亡くされた方ばかりです。未だお連れ合いを亡くされて数ヶ月も経っていない方、既に何年も経っている方、様々だと存じます。親御さんにしても配偶者にしてもお身内との死別は辛いものです。特に、お子さんに先立たれた方のご心中などは、他の人には推測しきれないものがあると思います。

昨年、四国の瑞応寺で修行中に出逢ったお爺さんのお話をさせて戴きました。覚えていらっしゃいますか？　一年足らずの間に、一人息子さんとそのお嫁さんに先立たれ、残ったお孫さん二人を一生懸命育てておられたお爺さんのこと。息子さんは交通事故で三十五歳で突然他界、お嫁さんはそのショックから精神的に病んでしまい、幼稚園児の男の子二人を残して自ら命を断ってしまったのです。お爺さんは、息子さんのお嫁さんを守ってやることの出来なかった申し訳なさに、息子さんのお位牌に詫びたと言います。そして、息子さんとそのお嫁さんに罪滅ぼしの思いで誓ったことは、残されたお子さん二人を祖父である自分の手で必ず育てあげます、ということでした。お爺さんの悪戦苦闘の毎日が始まります。炊事や洗濯そして育児、どれもお爺さんにとって慣れないことばかりです。「自分が育ててみせる」との思いで必死に頑張った

そうです。しかし、お嫁さんの二七日（ふたなのか）の晩、愕然としなければならない事実を知らされます。お孫さんを寝かしつけているうちにうたた寝をしてしまい、起き上がろうとすると体が重くて動けない、疲れが溜まっていたのでしょうね。そんなご自分に気づき、孫が成人するまで何年元気でいればいいのかと、思いではなく現実に目を向けたのだそうです。すると十六年は頑張らなくてはならない、可能か？　いや無理だ、九十一歳じゃないか、じゃぁー何年、何歳までなら可能なのか？「こう考えた時、和尚さん、儂は至極当たり前の事実を知って愕然としました」とおっしゃるのです。「和尚さん、人間の命なんて明日必ず生きているという保証がないんですね。当たり前過ぎる事実に愕然としました」と続けられました。

この事実に直面したお爺さんが、考えに考えた末出した結論は、孫を天国の親の元に送って自分も死のう、ということでした。両親に続いて、たった一人残った自分の死に立ち会わせたのでは、余りにもお孫さんが不憫だと考えたのだそうです。お爺さんは、お嫁さんの三十五日忌をその日と定め、その日まで精一杯お孫さんに愛情を注ぎ込んだと言います。そして、その日。仏教保育を実践する「ひかり幼稚園」から帰ったお孫さんが最初にしたことは、お母さんの霊檀にお線香を立て、二人仲良く手を合わせ

「われらは仏の子どもなり　うれしい時も

悲しい時も　お手々を合わせておがみます♪」と、幼稚園で歌う仏様の歌を歌い出したのだそうです。お爺さんもお孫さんの後ろで極自然に手を合わせて聞いていると「お祖父ちゃんも歌おッ！」とせがまれ、息子さんと遠い昔歌ったその歌を一緒に歌ったのだそうです。すると、目の前に並んでいるお孫さんの背中が一つに重なって、園服も今のものではなく息子さんが着ていたものに変わり、そこに座っていたのは紛れもなく幼稚園時代の息子さんだったというのです。

「儂は、ドキッとしました。そして、考えました。もし儂が今日死ぬとして、自分の子どもだったら不憫だからといって道連れにするだろうかと」

お爺さんは、ご自分の考えが間違っていたことを悟ります。親だったら、自分の分まで生きて欲しいと願うはずだと。そして、お爺さんは更に続けて言いました。「和尚さん、儂は信心深い人間のつもりで生きて来たが、儂の信心なんてものはまだまだいい加減なものでした。嬉しい、有り難い、自分にとって都合の良い事には手を合わせて来ましたが、辛い事、悲しい事に手を合わせたことなんか一度もなかった。だって、あの歌は、嬉しい時も悲しい時もお手々を合わせて拝みます、って言っているじゃないですか」。その時からお爺さんは、息子さんやお嫁さんの死、そして残されたお孫さん、全てを仏様のはからいと手を合わせて頂くことにしたというのです。そう思えるようになったら、同じ炊事や洗濯、子育てが、頑張っていた時のように辛くなくなったのだそうです。「命がある間精一杯仏様から授かった孫の世話をさせて戴きます」と、お爺さんは話を結ばれました。

お嫁さんの四十九日のご供養にうかがった時に、お爺さんから聞かせて戴いたお話です。素

晴らしい方だと思いました。僧侶である私が逆にお爺さんに導かれていました。

ここにお集まりの皆さんなら、お爺さんの悲しみや辛さをご理解頂けると思います。そして、その悲しみや辛さを超えてしっかり歩き出された素晴らしさを共に賞賛して頂けると思います。

亡き方に対して、何時までも「何故私を置いて先に行ってしまったの」と、嘆き悲しむことは自分のためにも亡き方のためにもなりません。そうでしょ。

嘆き悲しんでいるということは、亡き方が残された方を苦しめていることになるんです。亡き方が仏さまになるのではなく、皆さんに苦しみを与えているということから罪人（つみびと）になってしまうのです。そんなことは、皆さんの中のどなたも望んでおられないことでしょう。ならば、亡き方の死を大事な教えとして受け取り、「悲しく辛いことでしたが、あなたの死によって私は

こんなことを学び、今こうして生きています」と報告出来る自分にならなければなりません。それが、亡き方を「仏」にするということです。

皆さんは、亡き方、仏さまのご供養のためにこうして御遠方より善光寺さんまでそのお体をお運び下さり、先程は真心から「三帰依文」をお唱え下さいました。そして、今は仏教のお話を聞いて頂き、間もなくご一緒に御法要をお勤め頂きます。自らお寺にお参りし、手を合わせ、その口に三帰依文をお唱え頂いたのです。その行為こそが、亡き方を仏さまと受け取り、仏さまの導きで正しい今を生きていることなのです。これが、本当の供養の在り方です。

大事なことは、皆さんそれぞれの身・口・意の三業をどこに合わせてゆくかです。自分の都合に合わせるのか、亡き方を仏さまにするように合わせるのか、亡き人が戻らない限り自分に合わせれば悲しさ辛さが増し、亡き方を仏さまにしようと合わせれば、自らも仏の道を歩むことになるのです。

本日のお盆法要にお参りし、姿勢を正し、口に三帰依文を唱え、そのようにして調った今の心こそ、亡き仏さまへの最高最上のお供えです。どうぞ、未だ悲しみ苦しみから解放されていない方が御座いましたら、身を調え息を調えることを思い出して下さい。姿勢を調え手を合わせることを実践して下さい。心は心で解決出来ません。行いを通してしか変えられないのですから。

最後に、皆様が安らかな日々を送られることを祈念申し上げ、私の役割を終えさせて戴きます。ご清聴有り難う御座いました。

それでは、今一度姿勢を正し合掌して頂きます。

「願わくはこの功徳を以て、普く一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に仏道を成ぜんこと

を」

平成十八年七月一日善光寺釈迦殿に於て

〈本稿は、当日のお話をもとに、西田師に加筆訂正を加えて戴いたものです〉

善光寺霊園ニュース

「横浜やすらぎの郷霊園」とともに、今年五月に「港南ひばりの森霊園」が開園して、善光寺にご縁のある霊園が二つになりました。設備を拡充した「横浜やすらぎの郷霊園」の今と「港南ひばりの森霊園」の開園式の模様をご紹介します。

横浜やすらぎの郷霊園

やすらぎ観音・やすらぎ地蔵を安置

「やすらぎの郷霊園」は善光寺開創三十周年記念事業の一環として平成十一年に開園した霊園です。「皆様に心から喜んで、安心してお墓参りをしてもらえる霊園を作りたい」と先代の方丈が

三十年待ち望んだご縁による善光寺の霊園です。

その遺志を受け継ぎ、公園墓地としては珍しく経営母体のお寺が直接に管理・運営をしており、お互いに気軽に声を掛けあえる環境の中、気持ちよくお参りをしていただいております。

「宗派や国籍、年齢にとらわれずにお互いが理解しあい、調和できれば、きっと平和な世界、地球上の全ての国、人々に幸せをもたらすことが出来るはず」と常々話しておられた先代方丈の遺志を継いだかたちでこの度、ドイツ普門寺様に寄贈させていただいた二体の石仏と同じ仏様を霊園内にご安置させていただきました。

お互いが相手のことを思いやり調和する世界を「やすらぎの郷」として今後も守り続けて行きたいと願って止みません。

二体のお仏像はそれぞれ親しみを込めて「やすらぎ観音」、「やすらぎ地蔵」と名前をお付けして皆様にお参りしていただいております。

永代供養墓
「善光寺やすらぎの碑」建立

現在では、お子様がいらっしゃらない方や継承でお悩みの方が多い中、善光寺でも色々なご相談を承ってまいりました。その様な方々に対して安心していただくために永代供養墓を建立いたしました。

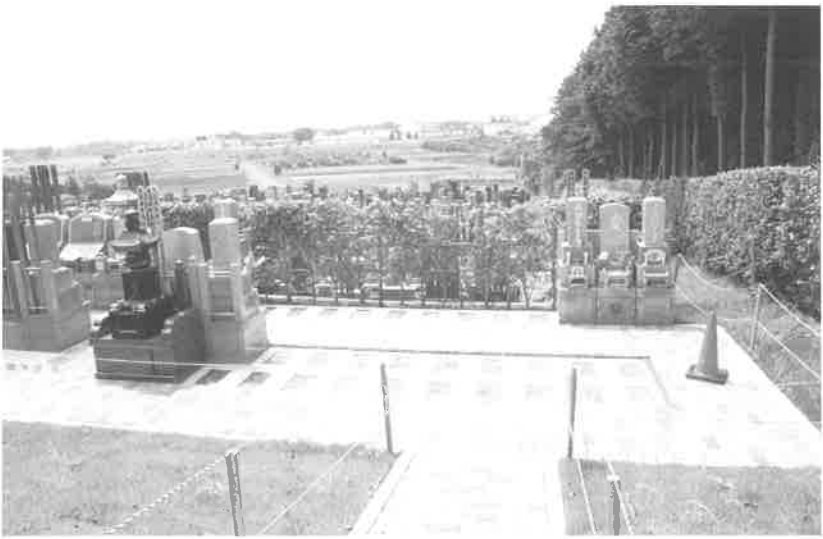
通常のお墓と同様に自然溢れる屋外でのお墓参り。お花やお線香の煙が絶えることない大きなモニュメントです。既に二百名を超える方々にお求めいただき、お遺骨をお納めする地下の納骨室には一葉観音像をお祀りし、ご供養させていただいております。

富士山を見渡せる高台など
新区画を開放

大変に好評につき、墓処の空き区画が少なくなったため、この度昨年十一月に墓地区画数の変更許可を取り、今年より新区画を開放させていただく事となりました。

駐車場からすぐの平坦な区域と、富士山を見渡す高台の区域に空きがございます。

お近くの方や墓地をお探しの方はご相談ください。



港南ひばりの森霊園

大圓和尚宿願の霊園が完成

「善光寺に隣接し壇信徒のみなさまが気軽にお参りできる霊園をつくりたい」。亡くなった先代方丈大圓老師の夢の一つでした。そして、この計画は先代方丈のご生前から着々と進められ、ついには志なかば完成を待たずして遷化されてしまいました。そして、その遺志を継いだ博志住職、また日野石材工業協同組合の皆様、地域の皆様方のご協力をいただき「港南ひばりの森霊園」として開園する運びとなりました。

平成十八年五月一日、善光寺釈迦殿では「港南ひばりの森霊園」の開園式が執り行われました。善光寺総代、熊谷豊太郎氏の開式の辞に始まり、続いて、本寺の光真寺、黒田俊雄老師の導師で法要がすすめられました。般若心経の読経に続き、霊園完成を記念し、仏前に置かれた慶祝の達磨に黒田老師の手で目が入れられました。

導師をおつとめいただいた黒田俊雄老師

引き続き、これまでご尽力、お力添えをいただいた方々、有限会社八千代商事代表取締役・原憲一郎様、漆原土木株式会社代表取締役・漆原是納様、有限会社三陽技建代表取締役・漆原勝史様、日野石材工業協同組合理事長・鳥居秀行様に博志住職より感謝状が贈呈されました。

ご導師をおつとめていただいた黒田俊雄老師、横浜市会議員・田野井一雄様、神奈川石材業連合会会長・花塚金次郎様、各位からのご祝辞にお応えして、博志住職と鳥居秀行様が謝意を述べ、善光寺事務局長富永豊重氏の閉式の辞で式典を結びました。

折から、春らしいみどりの風はここちよく、晴れ渡った空のもと、参列者は徒歩で「港南ひばりの森霊園」に向かい開園式を行いました。

「港南ひばりの森霊園」は善光寺から徒歩約五分、総区画数約四〇〇区画、一㎡、一・二㎡を中心に〇・四八㎡から二・二㎡まで多彩な区

画をご用意しています。詳しくは日野石材工業協同組合までお問い合わせください。〔問い合わせ　電話〇四五（八四二）七九三八〕

感謝状を受ける原憲一郎氏

花塚金次郎氏

田野井一雄氏

胡建明師の学位（博士号）授与式に列席して

第六回善光寺海外留学僧　安藤嘉則

今年六月二十八日、中国の南京芸術学院において第十一回善光寺海外留学僧の胡建明師の学位授与式に参列させていただきました。

胡師は天童山の僧でありながら、来日して東京大学で仏教学を学ばれ、その後ハンブルグ大学、東京芸術大学、南京芸術学院の各大学院で研鑽されました。また日本滞在中に永平寺前監院の南澤道人老師の弟子として大本山永平寺でも修行をなさっておられます。このように行学兼備しかつ日中の叢林に参じた学僧は他に例を見ません。

さて、このたび胡師は南京芸術学院に博士論

文「日本に伝来する宋代禅僧墨跡の研究」を提出し、美術学博士の学位を授与されました。

学位授与式当日の朝、ホテルから二人で授与式会場へ向って歩いていると、ふと胡師が赤いネクタイを私に示して「これは黒田方丈さまのネクタイです。方丈さまと共に授与式に臨むつもりです。亡き方丈さまには本当にお世話になりました」といわれました。その言葉に私は大変感銘を覚えました。授与式では胡師は角帽にガウンというスタイルとなり、学長より学位を受けました。

その後胡師と私は広東省広州市へ向い、「菩提達磨と禅宗文化」の国際学会に参加しましたが、その後中国の全国新聞『中国民族報』の「宗教周刊」（九月六日号）で、胡師と私の二人の研究発表がとりあげられ、レジュメが掲載されました。私も第六回の善光寺育英生なのですが、こうした国際学会という舞台で善光寺の留学僧が二人で研究成果を示すことができたこと、亡き黒田武志老師が築かれた育英会の一つの成果として改めて報告させていただきます。

光真寺・迦葉山弥勒寺参拝旅行

善光寺恒例、本寺光真寺（栃木県大田原市）への参拝バス旅行が、七月二十四日～二十五日に実施された。

参加者は熊谷総代以下総勢四〇名。

初日、小雨模様の東北道を北進、昼前光真寺（大田原藩主の菩提寺）に到着参拝。心温まる地元特産品の接待を受けたあと、東北道・関越道経由で上州猿ケ京温泉へ。湯量が豊富なことで有名な名湯で、点在する露天風呂に小雨の中蓑笠をかぶって

ニュース・アラカルト

の入浴は格別な風情。夕食は名物の豆腐料理を堪能。

翌日は晴天に恵まれ、日本一の天狗面で有名な迦葉山弥勒寺を参拝。樹齢千年を越えた杉の巨木に囲まれた境内を散策。

帰途沼田ＩＣ近くのきのこ園では採れたての茸汁で舌鼓をうち、昼食後は初めてのブルーベリー狩りを体験。パック一杯のお土産付に参加者一同感激。渋滞に巻き込まれる事もなく、夕方全員無事横浜へ。

今回のバス旅行の車中では、小田原成願寺の山口老師及び光真寺徒弟の黒田法正師から漢詩の解説、石原裕次郎の法事裏話、光真寺の歴史等ユーモアを交えた興味深いお話を伺い有意義な二日間でした。

今回の旅行に参加出来なかった檀家の方々、次の機会には是非御一緒出来る様切望します。

枝　博久　記

ニュース・アラカルト

スリランカ津波災害支援訪問記

鳥居　秀行

いまだ被害の復旧に至っていない。精神的にも癒えない。スリランカの現地に入ったのは、日本を発って二十一時間後、到着時よりテレビや新聞記者が追い続けている。私の存在はこんなにも大きいことなんだと再認識する。

「待っているのは、子供たち」、学校は形をとどめているが、勉強する環境にはなかった。お寺の住職、地域の市当局の方々が、「これは日本の善光寺や市民の厚いお心遣いと支援の贈物」だと説明される。子供たちは、合掌、合掌、アリガトウの連呼。胸が熱くなる。

この光景と感動をご協力いただいた方々に、どう伝えるか。「コトバ」が思いつかなかった。贈物は、私の手よりひとり、ひとり手渡した。

カバン、ノート、筆記用具、教科書など、ささやかではあるが、よろこびは地球の重さ、周辺は、まだ極悪な境遇に耐えて、忍んでいる惨状はあまりにきびしく、表現できない。二〇〇三年先住方丈さまと当地訪問大歓迎のお返しの一部という思いが実現につながった。地域の石屋さん、そして善光寺さん、ご賛同いただいた方々に感謝と報告を申し上げたい。

ニュース・アラカルト

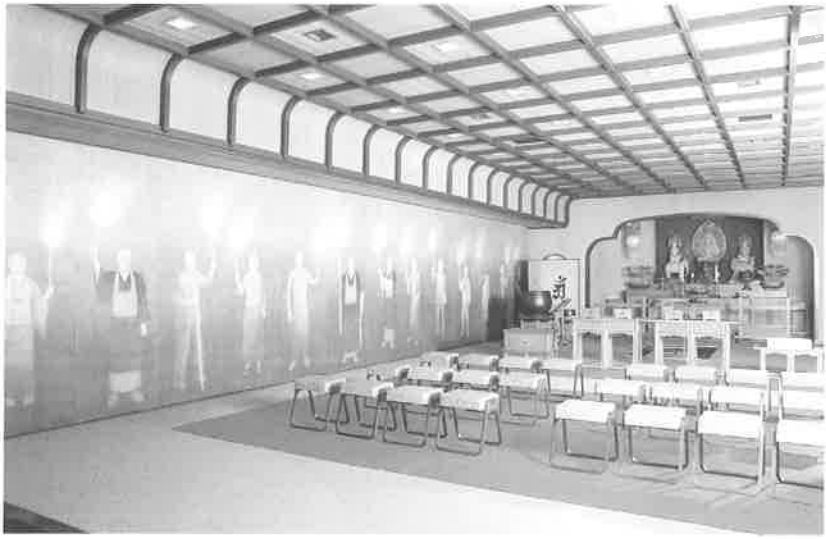
水墨壁画「十六羅漢成寿」を奉納

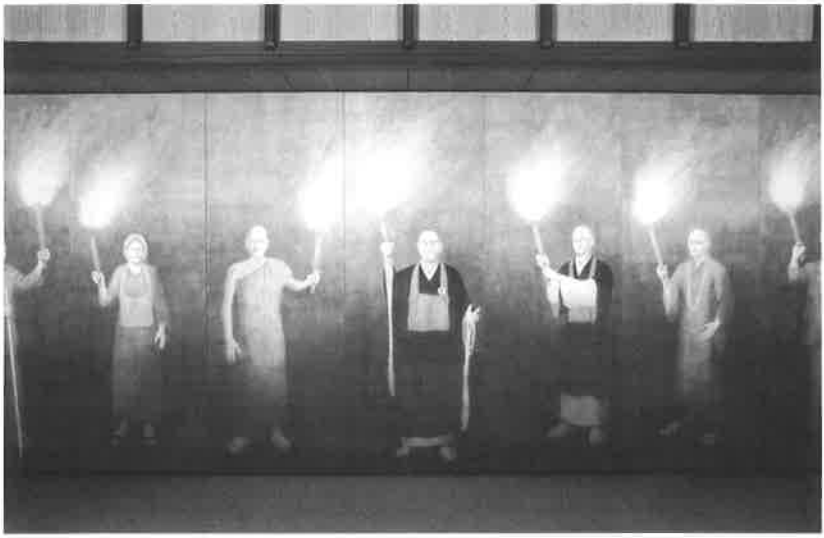
平成十八年七月、善光寺に左右十六メートルに及ぶ巨大な水墨壁画が奉納されました。

この作品は先代武志方丈と親交のあった水墨画家の東野光生氏の作によるもので、武志方丈の生前から氏が依頼を受けていたものです。東野氏の作品が善光寺に納められるのは二度目で、この「十六羅漢成寿」も三部作の一つとして、前作「臨照図」に続く作品です。東野氏は「天・地・人」をモチーフとする構想を固め、この「羅漢図」そのなかで「人」をテーマにしたものですが、なかなか構想がまとまらずに時間が経過していたようです。

そんなときに武志方丈の急逝の報に遭い、東野氏には新しい構想が生まれました。武志方丈の遺偈「草鞋萬里／海内開縁／大志無尽／成寿

ニュース・アラカルト





ニュース・アラカルト

厳然」に表されている方丈の生涯を縁のある人々とともに描いたものです。

真ん中に正面を向いて立つ武志方丈を中心に、国籍や出家在家も異なる老若男女がたたずむ構図は、「身を削り人に尽くさん」の誓願に生きた武志方丈の理想がテーマになっています。「タイマツは法燈であり、また私たち一人一人の命の灯であり、未来への光明も表しています。それをすべての人が手に握っていることを表現しました」と東野氏は説明します。

この壁画は方丈の三回忌にお披露目される予定です。

「京都　清水展」に博志方丈が森猊下を訪問

世界遺産にも登録されている京都清水寺。太祖瑩山禅師報恩顕彰碑の建立から善光寺との間に深いご縁が生まれました。「奥の院御本尊御開帳」を記念して「京都　清水展」が平成十八年三月二日から二十六日までの期間、横浜駅東口の横浜そごうにある「そごう美術館」で開催されましたが、その初日の開眼法要で導師をつとめられる清水寺貫主森清範猊下からご招待をいただき、先代方丈夫人倫子さま、博志方丈ほか四名で「京都　清水展」を訪問し、森猊下から温かいお言葉をいただきました。

高松寺にて福田孝雄老師が晋山式

去る平成十八年十一月四日に育英会の参与でもある福田孝雄老師の晋山式が、御自坊である山形県山形市多幸山高松寺にて勤修されました。

老師は、先代方丈と駒沢大学大学院での同期で、同大学にて長くサンスクリット語、パーリ語の教鞭をとられていましたが、この度、実兄でもある先代住職の遷化に伴い同寺の第十九世を拝命されました。高松寺先代住職の本葬の儀もかねて慶弔会として盛大に執り行われ、当日は近隣や法類のご寺院九十名、お檀家三百名が来山され、善光寺からは博志方丈と育英会代表として胡建明師が随喜しました。

ニュース・アラカルト

育英会寄付者

■平成17年度
滝沢　孝子殿
石川多加子殿
内田　京子殿
黒河内貞子殿
渥美コーポレーション
古郡　博殿
富田　繁殿
良長　院殿
貞昌　院殿

■平成18年度
滝沢　孝子殿
中村　晴夫殿
岩井　文子殿
池田　耕三殿
山本喜代司殿
石川　征一殿

いつもご寄付賜りありがとうございます。

御足蹟を思う

北海道
中央寺住職　南澤道人老師

御先住方丈の在りし日を偲び大きな御足蹟を思いながら御読させていただきます。

諸行無常の真理

千葉県
真如苑総苑室
伊藤　勲様

老師のご生前には、私ども「真如苑」に何度となくおいでくださり、お元気なご様子と「善光寺」のめざす活動を力強く語っていただいたものでした。もともと昭和四十一年秋、老師がまだタイ国「ワットパクナム」にご修業中、同寺に蔵されていた由緒正しい仏舎利を当苑に捧持していただいたご縁が最初のことでした。ご帰国後、横浜に「善光寺」を開創され、以後、目するところに向かい、精力的に努力される姿勢に拍手をおくっていた次第です。あまりにも早いご遷化ですが、これもご自身が常に語っておられた〝諸行無常の真理〟を身に現し、束縛のない状態で新たな活動を展開していかれるためなのではと、悲しみのうちに得心いたしております。

日タイ仏教交流に努力

埼玉県
松下正弘様

師走の候　黒田武志大和尚の悲報に接し、哀悼の気持ちでいっぱいです。私の出家（パクナム寺院）に際し、多大なご尽力をいただき、また、日タイ仏教交流に多大な思いをいただき、感謝しております。この度の『成寿（冬季36号）』を見させていただき、ますますの思いが募ります。故黒田大和尚の志を受けて、微かながらこれからも日タイ仏教交流に努力いたします。

日々精進を

東京大学
陸晩霞様

故黒田武志方丈の生前の御姿をもう一度偲ばせていただき、感無量でございます。私ども育英生も、これから故人の遺志を受け継ぎ、各自の生きる分野で日々精進していかなければなりません。逝き去った故方丈の御恩に報いる最善の方法はこれよりほかはないと思います。

凛としたお声

小金井市
加藤榮一様

想えば日仏セミナーの折に師父に扈従してパリの学会で報告したことなど、楽しい想い出が去来します。学会での師父の凛としたお声で諄々と説かれるお姿は今も脳裡に焼きついております。

インド留学を終えて

茨城県
小野卓也様

武志老師御遷化の後も多く

の方がその御遺徳を偲んでいるのだと認識いたしました。私事、育英会の御助力に依りまして、無事二年間のインド留学を終え帰国いたしました。現在は自房にて檀務を行いつつ、博士論文を執筆しております。「少年老い易く学成り難し」と常々感じておりますが、武志老師に今も励まされるような気持ちで精進いたします。

御法愛に深く感謝

世田谷区
吉津宜英様

武志方丈さまの肉声が聞こえてくるようです。いや、いつまでも方丈さまの法身は肉身として温かに私達の方に向かって話しかけてくださるのではないでしょうか。私自身へのまた仏教経済研究所への御法愛に深く感謝申し上げます。

今後とも充実した『成寿』を

町田市
鶴見大学名誉教授
角家文雄様

故武志老師には、いろいろお世話様になり心から感謝しています。大学の私の研究室に約十回、町田のわが家にも二回ご来訪いただきました。中興二世の名にふさわしいご活躍でしたので、往時を感慨深く思い出しています。

故武志老師は『成寿』の発行に意欲を燃やしておられましたので、今後とも充実した内容の寺報を刊行されるようお願いいたします。

方丈さまの種

三鷹市
早田啓子様

方丈さまが亡くなられて、早一年が経過しました。余りに突然のことで、まだ善光寺に伺えば、大きな御声が聞こえてきそうな気がいたします。釈尊は人を見て法を説いたと

いわれますが、方丈さまもその通りで、実にいろいろと教えていただいたと思います。

一粒一粒は小さいですが、方丈さまの種はきっと世界の各地で芽を吹き大樹に育っていくものと信じます。

耳に残るお声

横浜市　田沢洋子様

拝読後は心温まる想いがいたしますのに、本号につきましては、方丈さまが何故に…と胸が詰まるばかりでございます。

墓参りの帰途は、しばしば方丈さまにお目にかかりまして、ほっとする一時をいただき生きる目標をお教え願っておりました。昨日のように思われます。その折、「ミチ子ミチ子」と奥様をお呼びする声も耳に残っております。

嬉しい博志方丈の姿

千葉県　藤田正子様

伊藤先生の奥様には時折お会いし、黒田先生のお話をし、突然の死に、そしてもう一年がたった事に月日のたつ事の早さに言葉もありません。しかし、黒田先生亡きあと、御子息が立派にあとを継がれていらっしゃるとのこともお聞きし、また、『成寿』の中でのお写真を拝見し、とてもうれしく、さぞかし亡き御父上も天国で喜ばれていらっしゃると思います。こからもさらにがんばってください。

継続は力なり

横浜市　戸塚正実様

年末になると昨年末の遷化の報のショックを思い出します。『成寿』拝読、うれしかった。今年一年、もう『成寿』は休刊かな？と心配しており

ました。追悼号として立派な編集です。良くやりましたね。

坊さんになりそこねた私が定年後も仏教関係の編集ができるのも、大圓和尚を始め駒大三心会の畏友達のお陰です。三心会報も十九年になり、これから編集に入ります。黒田兄の想い出を語る頁もあります。『成寿』は善光寺の財産です。決して立派なモノを作ろうとせず、続けることが大切です。継続は力なり。次号が大変だ。楽しみにしています。

いつか作品に

富山県
北陸児童文学協会員
浅香　恵様

黒田武志大和尚様の死去を知らずにおりました。平成九年に小矢部市の生涯学習講座で講演をいただいて、またお目にかかれると思っていましたので残念でなりなせん。

理想をかかげて、かけぬかれていた御姿を児童文学の作品として書いてみたいと願っています。一年間ほど時間をくださいませ。

奥様はどうか新住職博志様と横浜善光寺の灯を高く広く照らしていってくださいますよう、お祈り申し上げます。

世のため人のため

愛知県
大野栄人様

先住様は生きた菩薩として、世のため人のために慈悲行を実践されました。衷心より感謝申し上げます。

愛語をかける

横浜市
石井修道様

黒田武志和尚さまには毎日顔をあわせることはありませ

んでしたが、会うごとにやさしく親切にしていただいたことが思い出されます。こうして『成寿』を通して遺影に接しても、またひょっこりと私の目の前に来られて声をかけてくださるような気がしてなりません。ご恩をいただいて、それに報いるのは、別の人に振り向けることが必要だと聞いたことがあります。今、私にできることは、誰かに愛語をかけてあげることかと和尚さまの姿を思い浮かべながら感じています。

情熱を感じて

山形県　井筒屋　榎森正浩様

大圓武志大和尚様の御遺徳を偲ばせていただきながら、有難く拝読いたしました。私は最も御指導をいただいた者の中の一人だと思っております。

新方丈様の巻頭言の中の固い御決意に、まるで生きている菩提様のような在りし日の先住大和尚様のすごい情熱を感じました。

懐かしい思い出

栃木県　大嶋　正様

約半世紀前、大高で、武志君は生徒、私は教師という間柄でしたが、当時偶々ＳＰに代って出始めたＬＰレコードと二人のクラシック音楽好きが取り持つ縁で大高図書館に視聴覚部を作り、予算を取ってもらってレコードコンサートを開くことが出来るようになったという誠に懐かしい思い出があります。私は八十三才、何とか生きていますのに残念至極です。しかし、今日

までに築かれた数々の偉大なご業績に対し常に誇りをもって参りました。『成寿』を通じての今日までのご厚誼に対し謹んで感謝申し上げお礼と致します。

スリランカの思い出

沖縄県
国吉司図子様

二〇〇三年三月、スリランカに随行した一人でございます。黒田大和尚の側近く拝顔の栄に浴し、短い期間ではございましたが、和尚様の歩まれた御業績に敬意の念を深くした次第です。特に脳裡に深く刻まれたのは留学僧育英制度でございました。八十近い私ですが、何時の日か留学の機会を申し出たいと思う折でした。黒田武志大和尚様の御冥福をお祈り申し上げると共に、御家族の皆様にお悔やみを申し上げます。残された御家族にとって尽きぬ大恩と想い出の日々とお察しいたしますが、一日も早く元気になられ、残された大事業が大成されますことをお祈り申し上げます。

編集後記

▼今号も、多くの方々のご協力をいただき無事に発刊できましたこと心より厚く厚く感謝申し上げます。

▼師父の一周忌のご報告を申し上げるのと同時に、十二月十二日に三回忌の法要を迎えることとなりました。月日の流れの早さをしみじみ感じております。

▼初夏には、大乗寺山主、東隆眞老師にお忙しい中、数時間に亘って「成寿」の取材にお応えいただきました。東老師と師父のご縁は、尊く、篤く、深いものであったことを再認識致しました。また私の永平寺修行時代、同日安居で修行を共にした石黒玄章師が只今大乗寺の知客という役で、東老師の下でさらに修行しているのです。この因縁の深さを強く感じました。

▼特集ドイツ普門寺は、平成十六年に私も修行させていただいた懐かしい場所です。慣れない土地で、中川老師をはじめメンバーの方々に大変お世話になりました。普門寺の皆さまに再びお会いでき本当に嬉しく思いました。特に普門寺晋山式ではスティしながら、造園のマイスターを目指していた下川さんが、なんと出家され弁事というお役をしているのに驚きました。来春は帰省し日本の専門僧堂で修行されるそうです。改めて中川ご老師の教化と感化力に敬服いたしました。

▼今年は師父が待ち望んでいた「港南ひばりの森」も開園し、「横浜やすらぎの郷」も新区画開放し、更に、釈迦殿の入口が自動ドアになり、山内も少しずつ時代に対応し皆様がお参りしやすいお寺づくりをめざして、今後精一杯精進してまいります。何卒変わらぬ御法愛、御教導賜りますこと心よりお願い申し上げます。

▼今号は多くの方々とのご縁のありがたさ、人と人のつながりの大切さを強く感じることのできた「37号」となりました。

▼明年一月九日㈫は新年祈祷会です。皆様おそろいでお参りください。向寒の砌、どうぞお体に充分に御留意いただき佳いお年をお迎えください。

（博志）

成寿　第三十七巻
平成十八年十二月一日発行
発行所　成寿山善光寺
横浜市港南区日野中央一丁目十二番九号
電話　〇四五(八四四五)一三七一
FAX〇四五(八四六)二〇〇〇
印刷所　神奈川新聞社出版部

横浜善光寺